342
425ィ

始

工P53
342-425

補增訂改

法學士 岡實 著

工場法論

東京 有斐閣書房

大正
6. 9. 12
內交

全

序

歐洲ノ大亂勃發スルヤ我カ商工業界ハ頓ニ活氣ヲ呈シ之ヲ戰前ニ於ケル沈滯ノ狀況ニ比較スレハ人ヲシテ隔世ノ感アラシム。此間ニ在リテ最モ注目スヘキモノハ勞働力ノ生產上重要ナル所以ノ漸ク當業者ノ間ニ痛切ニ認識サルルニ至レルコト卽チ是ナリ。此認識ニ伴フテ社會政策的施設ハ俄カニ朝野ノ留意スル所トナレルカ如シ。

工場法ハ本邦ニ於ケル社會政策的立法ノ先驅ト見ルヘキモノニシテ其ノ制定其ノ實施ニ至ルマテ幾多ノ難關ニ遭遇セルモ遂ニ昨大正五年九月一日ヲ以テ比較的圓

滿ナル實施ヲ見ルニ至レリ。斯クノ如クシテ本邦ニ於ケル社會政策ノ發途ニ就ケルハ吾人ノ慶賀ニ堪ヘサル所ナリ。

友人岡實君曩ニ工場法ノ制定セラルルヤ工場法論ヲ著シ。同法制定ノ根據ヲ論シテ其ノ必要ヲ切言シ條章ノ解釋亦詳細ニ亘リ當業者ヲシテ適歸スル所ヲ知ラシメタリ。

今ヤ同法實施後滿一週年ヲ迎フルニ當リ之カ紀念トシテ君ハ前著ニ對シ大ニ增訂ヲ施シテ之ヲ再ヒ世ニ公ニセムトス。君ノ此ノ近業ヲ觀ルニ工場法ノ內容ノ章ニ至リテハ新ニ公布セラレタル勅令省令ノ解釋ヲ加ヘタルヲ以テ其ノ容量ノ豐富ナル復タ舊著ノ比ニ在ラス。加フルニ全然新ナル工場設備、工場管理、工場監督等ニ關スル數章ヲ設ケタルヲ以テ名ハ增訂ナリト雖實ハ新著ト目スルモ不可ナキモノナルカ如シ。然リ而シテ著者ノ所論ノ適確ニシテ說明ノ懇切ナル此類ノ著書中ニ在リテ群ヲ拔キ學界ヲ稗益シ實際家ノ參考トナルヘキコト甚大ナルモノアリト謂フヘシ。

岡君ハ明治三十一年東京帝國大學ヲ卒業シ直チニ法制局ニ入リ後轉シテ農商務省ニ移リ明治三十六年九月工務課長トナリ爾來今日ニ至ルマテ工場法ノ制定及實施ニ參與スルコト實ニ十有四年今ヤ同法實施セラレテ無

事平穩ノ間ニ一週年ヲ迎フルハ君カ宿昔ノ志成レル所以ニシテ喜悅之ニ過クルモノ蓋シ少カルヘシ。君カ勞働者問題ニ對スル態度ハ本書ノ一節「精神的工場管理法」ニ據リテ明カナリ其ノ凡俗ト類ヲ異ニスルヤ知ルヘキノミ。

本書增訂成ルヤ君余ニ徵スルニ序ヲ以テス余敢テ辭セス玆ニ感想ヲ錄シ併セテ君カ健康ヲ祈ルト云爾。

大正六年八月　　金井延

序

工場法ノ制ハ文明諸國ノ通有スル所ニシテ蓋近世ノ經濟組織ニ於テ缺クヘカラサルモノニ屬セリ故ニ苟モ我社會ノ改良ヲ念ヒ國運ノ前途ヲ慮ル者ハ之ヲ忽諸ニ附スヘカラサルヲ知ル於是乎政府モ其制定ニ勉メ明治三十年案一タヒ成リ將ニ議會ニ提出セラレントシテ果サス翌年農商工高等會議ニ諮問セラル爾來改刪更訂ヲ經テ明治四十四年三月其發布ヲ見ルニ至レリ若夫レ之レカ實施ノ曉ニ至ラハ我カ勞民ノ體力ヲ維持シ其智識ヲ養ヒ品性ヲ高メ以テ國家工業ノ基ヲ安ンスルニ足ルヘシ現今歐米各國ニ於テ勞働問題ノ研究盛ニ行ハレ之レ

ニ關スル著書モ啻ニ汗牛充棟ノミナラサルナリ然ルニ我工場法ノ發布日尚ホ淺ク之レヲ論スルノ書モ寥々晨星ノ如シ今岡君工場法論ヲ著ハシ將ニ之レヲ世ニ公ニセントス余嘗テ工務局ニ在リテ法案ノ制定ニ與カリシヲ以テ茲ニ一言ヲ徵セラル未タ其書ノ全班ヲ窺ハスト雖君カ其職ニ在リテ研鑽考覈ノ資ヲ以テ此ノ書ヲ著ス其所說ノ正確ニシテ我勞働社會ノ改良發達ヲ裨補スルヤ蓋シ鮮少ニアラサルヘシト信ス

大正二年八月

志村源太郎

序

岡實君夙ニ政治經濟ノ學ヲ修メ農商務省ニ入リテ工務課長ト爲リ進ミテ工務局長ト爲ルヤ鋭意本邦ニ於ケル工場及職工ノ實狀ヲ調査シ諸外國ニ於ケル工場制度ヲ參酌シテ適切ナル工場法案ヲ起草シ該法案ハ遂ニ帝國議會ノ協贊ヲ經テ法律トシテ發布セラルルニ至レリ惟フニ工場法ノ制定ハ多年朝野ノ宿題タリシモノナルニ能ク其ノ解決ヲ見タル所以ノモノハ素ヨリ時ノ農商務大臣タル大浦子ノ識見ト勇斷トニ由ルト云フト雖而モ亦滿腔ノ熱誠ト積年ノ蘊蓄トヲ捧ケテ子ヲ補佐シタル君ノ力ニ俟タスンハアラザルナリ而シテ君今ヤ工場法

論ヲ著ハシ世ニ公ニセントス則チ其ノ學界ニ貢獻スル所ノ甚大ニシテ世間ニ裨益スル所ノ尠少ナラサルヤ固ヨリ知ルヘキナリ是余カ先本書ヲ歡迎スル所以ナリ然レトモ余カ本書刊行ノ擧アルヲ聞キ衷心欣喜ニ堪ヘサル所以ノモノ別ニ又有リ蓋工場法ハ已ニ制定セラレタリト雖而モ之カ實施ニ付テハ大ニ準備ヲ要スルモノアリ是ヲ以テ君ハ更ニ各種ノ工業ニ渉リテ精細ナル調査ヲ遂ケ諸外國ニ於ケル工場法實施ノ狀況ニ付テ亦詳密調査スル所アリ若シ夫レ法律施行上必要ナル命令其ノ他ニ至リテハ皆既ニ其ノ成案ヲ得タルヲ信ス然レトモ法令ノ主旨精神ヲ明ニシテ世人ヲシテ之ヲ周知セシメ

當業者其ノ他ノ關係者ヲシテ豫メ之ニ備ヘシムルニ非サレハ能ク圓滿ナル効果ヲ收メ難キモノアリ岡君蓋此ニ見ル所アリ其ノ蘊蓄セル識見ト調査セル事項トヲ本書ニ收メ以テ法令ノ主旨ヲ明ニシ其ノ精神ヲ徹底セシメントス然レハ則チ本書ノ刊行亦工場法實施準備ノ一事業ニ外ナラスシテ君ノ該事業ニ於ケルヤ眞ニ至レリ盡セリト謂フヘシ是卽チ余カ衷心本書ノ刊行ヲ欣ヒ著者ノ勞ヲ感謝スル所以ノ最大ナル理由ナリトス抑明治以降法令ノ發布制定セラレタルモノ千百ニシテ足ラスト雖而モ周密愼重ナル調査ヲ重ネタルコト工場法ノ如キハ甚タ多カラスト謂フヲ得ヘキカ其ノ來歷ハ本書ニ

詳ナルヘキヲ以テ今贅セス本法已ニ爾ク愼重ナル調査ニ成リ之カ實施亦爾ク周到ナル準備ヲ以テス則チ工場法ノ一旦施行セラルルニ及ンテ必スヤ凝滯スル所ナク能ク完全ナル成績ヲ收メンコト期シテ待ツヘキナリ然リ而シテ工場法已ニ發布セラレテ茲ニ三年而モ其ノ未タ施行ニ至ラサル所以ノモノハ同法ノ施行ニ付テハ新ニ經費ヲ要スルモノアルニ先年來政府ニ於テ暫ク一切ノ新事業ヲ延期シ先一般行政及財政ノ整理ヲ行ヒ然ル後更ニ必要ナル事業ヲ施設スルノ方針ヲ採リタルニ因ラスンハアラス然ルニ是等ノ整理タル今ヤ已ニ一段落ヲ告ケ之カ完成ヲ見ルコト遠キニ非サルカ如シ然ラハ則チ事體ノ緊切ニシテ準備ノ整頓セルコト工場法ノ如キモノハ之カ實施ヲ見ルノ日亦將ニ近キニ在ラントス此時ニ當リテ本書ノ刊行セラルルアリ寔ニ時機ノ宜キヲ得タルモノト謂フヘシ是亦余カ衷心ノ欣喜一層ヲ加フル所以ナリ乃チ序文ノ需アルニ及ンテ自ラ揣ラス敢テ所感ヲ披瀝シテ以テ之ニ充ツト云フ

大正二年八月

辱知　窪田靜太郎

序

多年ノ懸案タリシ工場法ハ已ニ調査ノ時代ヲ離レテ實行ノ時代ニ進ミタリ此時ニ當ツテ先キニ法案ノ起章ニ從事シ尚ホ實施ノ局ニ當ラルヘキ岡君ノ本書ヲ公刊セラルルハ實ニ時機ノ宜シキヲ得タルモノニシテ我國社會政策ノ發展ニ多大ノ貢献ヲ爲スモノト云ハサルヲ得ス

顧フニ我國工場法カ勞働者ノ保護ニ就キ欠陷ノ少カラサルコトハ爭フ可ラサルノ事實タリ工場法ノ公表セラルルヤ獨逸ノ先輩某氏ハ遙カニ書ヲ寄セテ曰ク貴國工場法ノ不備實ニ極マレリ此ノ如キ法律ノ制定ヲ以テ自

ラ甘ンセサルヲ得サル貴國社會改良家ノ心事ハ洵ニ同情ニ堪ヘスト余ハ之ニ答フルニ適當ノ辭ナキニ苦ミタリ抑モ此批評タル啻ニ海外識者ノ口ニ上ルノミナラス我國ノ同志ニ在ツテ亦同一ノ言ヲ爲セル者ナキニ非ラス然リト雖モ事ニ順序アリ物ニ歴史アリ一擧功ヲ奏スルヨリモ寧ロ進歩ノ堅實ナルヲ望マサルヲ得ス我國當初ノ工場法ニ於テ形式徒ラニ美ニシテ實行之ニ伴ハサルコトハ余輩ノ與セサル所ナリ

余ノ見ル所ニ依レハ我國工場法ニ於テ一種ノ特徴ヲ存シ以テ海外ニ誇ルヘキモノアリ他ナシ其ノ内容ノ一部トシテ工場主ヲシテ災厄ニ關スル救濟ノ責任ヲ負ハシメタルコト是ナリ歐米諸國ノ社會立法ニ於テハ工場法ト勞働保險トヲ以テ各特別ノ法律ト爲シ災厄救濟ニ關シテハ之ヲ勞働保險ニ讓ルヲ以テ例トセリ然ルニ我國工場法ニ於テ此規定ヲ存セルハ外國ニ比類ナキ立法ノ長所ト云ハサルヲ得ス且又法案カ議會ノ問題タル時ニ當リ政府當局ハ災厄ノ豫防ニ關シ最モ意ヲ用ヰ充分ノ監督ヲ施スヘキコトヲ反覆言明セリ之レ我國工場法ノ實施セラルルヤ年齢、時間、徹夜業等ノ制限ニ就テハ不備ノ點固ヨリ多カランモ災厄ノ豫防及救濟ニ就テハ其ノ効果ノ見ルヘキモノアルハ亦疑ヲ容レサルナリ

羅馬ノ古城ハ一日ニシテ成ルニ非ラス我國社會政策ノ

前途ハ尙ホ遼遠ナリ工場法ニ就テモ余ハ朝野ノ同志ト與ニ隱忍持久以テ他日ノ大成ヲ期セント欲ス余ハ著者カ本書ヲ公刊スルノ意ヲ諒シ茲ニ蕪辭ヲ卷首ニ題シ之ヲ江湖ニ推奬スルコト爾リ

大正二年八月

桑田熊藏

自序

工場法ハ明治四十三年ニ制定セラレ爾來尙ホ未タ實施セラレスト雖早晩其ノ運ヒニ至ルヘキハ疑ヲ容レス

工場法ノ實施セラルルト否トニ關セス國富增進ノ淵源タル工業ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ケシムル爲工場勞役者ノ過當ノ勞働ヲ節制シ及工業ニ伴フ諸般危害ノ原因ヲ除去シ進ンテ病災ヲ扶助スルノ途ヲ啓クハ洵ニ時務ノ急ナルモノト謂ハサルヘカラス不肖往年工場法ノ制定ニ參與シ同法ニ關スル多少ノ研究資料ヲ蒐集スルヲ得タリ曩ニ「工場法ノ制定ニ就テ」ト題シ之ヲ國家學會雜誌ニ掲載シタルカ今茲ニ之ニ多少ノ訂正ト增補

トヲ加ヘテ剞劂ニ附ス眇タル小著固ヨリ多キヲ望マンヤ若シ學者及實際家ノ多少ノ參考資料タルヲ得ハ望外ノ幸ナリ

大正二年夏日

著者識

自序（第二）

本書前版ハ工場法制定ニ至ル迄ノ間ニ調査蒐集シタル各種材料ヲ整理シ、之ニ卑說ヲ加ヘテ大正二年十月ヲ以テ世ニ公ニシタルモノナリ。當時窃ニ惟ラク工場法ハ朞年ナラスシテ必スヤ其ノ施行ヲ見ルニ至ラムト。然ルニ事豫想ニ反シ、財政ノ極端ナル緊縮ト累次ニ亘ル政變トハ、遂ニ其ノ施行ヲ大正五年秋期迄延期スルノ已ムヲ得サラシメタリ。此ノ間我國ノ工業ハ駸々トシテ其ノ歩ヲ進メ、工場及職工ハ日ニ月ニ其ノ數ヲ增加シタリト雖。多數ノ工業主ハ依然「生產第一」ヲ旨トシ勞働時間ヲ適度ニ制限シ、又ハ工場ノ設備ヲ完全ニシテ「安全第一」ノ主義ヲ實行ス

ルハ即チ根柢ニ於テ其ノ工場ノ生產能率ヲ多大ナラシムル所以ナルコトニ着目シタル者甚タ尠ク、從テ既ニ公布セラレタル工場法ノ明文ニ準據シタル新施設トシテハ何等見ルニ足ルヘキモノナカリシナリ。斯ノ如キ狀態ニシテ此以上繼續スルニ於テハ、工業ノ發達ニ原因スル社會上ノ弊害ハ實ニ憂慮スヘキモノアルヲ以テ、政府ハ當時正式ニ議會ノ協贊ヲ經タル工場法施行ノ豫算ナキニ拘ラス、前年度ノ經費ヲ差繰リテ大正五年度ニ於テ法律ヲ施行スルニ決シ。大正四年十二月ヨリ同五年一月ヲ以テ農商務省及各地方廳ニ工場監督官吏ヲ配置スルト共ニ、同五年二月ヨリ三月ニ渉リテ地方監督官吏ノ講習ヲ開催シ、一面ニハ工場法規ヲ關係者ニ周知セシメテ豫メ必要ノ準備ヲ爲サシムル爲、主要工業地ニ講話會ヲ開キ、同時ニ施行勅令及省令ノ立案、諮詢討議等ニ全力ヲ傾注シタリ。斯クテ大正五年八月施行命令ハ發布セラレ、翌月一日ヲ以テ法律ノ實施ヲ見タリ。爾來今日ニ至ル迄ノ經過ヲ概觀スルニ、各地方當局者ノ努力ト商業會議所、同業組合等ノ協贊ニ依リ、法令ノ趣旨ハ漸次當業者ノ間ニ徹底シ、隨所圓滿ニ其ノ運行ヲ見ルハ我工業界ノ爲歡喜ニ堪ヘサル所ナリ。不肖曩ニハ法律ノ制定ニ參與シ、今亦其ノ施行ノ事ニ從フノ幸運ヲ擔フ。茲ニ於テカ法律制定後最近ニ至ル迄ノ各種調査材料ヲ整理スルト共ニ、更ラニ先進諸國ニ於ケル工場ノ

設備竝管理等ニ關スル實例及學說ヲ涉獵シテ舊工場法論ヲ增補訂正シ、以テ當路者ノ參考ニ供セムトスルノ念洵ニ切ナルモノアリ。然ルニ世界戰爭ノ影響ヲ受ケタル我商工社會ハ日ニ月ニ益多端ヲ極メ公務ノ餘暇ヲ得ルコト實ニ容易ナラサルモノアリ。爲ニ著論ノ進捗意ノ如クナラス、近クハ法令施行ノ一周年ヲ迎ヘムトスルニ至レリ。喟然トシテ嘆スラク斯ノ如クムハ何レノ日カ克ク宿昔ノ冀望ヲ達スルヲ得ムヤ、如カス大成ヲ他日ニ期シ此ノ紀念日ヲトシテ一旦之ヲ剞劂ニ付セムニハト。是レ茲ニ本著ノ刊行ニ至リタル次第ナリ。左レハ章句ノ間推敲ノ未タ全カラサルモノアルヘク、文字ニ魯魚ノ誤少カラサルヘキハ、豫メ讀者ノ諒承ヲ請ハサルヲ得サル所ナリ。然レトモ若シ本著ニシテ幸ニ何等カノ參考資料ヲ當路者ニ提供スルヲ得ハ、之レ著者カ望外ノ幸トスル所ナリ。

大正六年八月十九日

鵠沼老父母ノ草蘆ニ於テ

著者識

工場法

（明治四十四年三月二十八日公布法律第四十六號）

第一條　本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス

一　常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノ

二　事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ

本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

第二條　工業主ハ十二歳未滿ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歳以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間

ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ本法施行後十五年間ヲ限リ前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條　工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用セス但シ本法施行十五年後ハ十四歳未満ノ者及二十歳未満ノ女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一　一時ニ作業ヲ為スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

二　夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三　晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

第六條　職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行後十五年間第四條ノ規定ヲ適用セス

第七條　工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ設ケ職工ヲ二組ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テハ少クトモ四回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十分、十時間ヲ超エルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時

間ヲ就業時間中ニ於テ設クヘシ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルトキハ十日ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換スヘシ

第八條　天災事變ノ為又ハ事變ノ虞アル為必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ事業ノ種類及地域ヲ限リ第三條乃至第五條及前條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條及第五條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ届出テ一月ニ付七日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第九條　工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、檢査若ハ修繕ヲ為サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ為サシメ其ノ他危險ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十條　工業主ハ十五歳未満ノ者ヲシテ毒藥、劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性若ハ引火性ノ料品ヲ取扱フ業務及著シク塵

埃、粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務其ノ他危險又ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十一條　前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム

前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十五歳以上ノ女子ニ付之ヲ適用スルコトヲ得

第十二條　主務大臣ハ病者又ハ産婦ノ就業ニ付制限又ハ禁止ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條　行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建設物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ為必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

第十四條　當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

第十五條　職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

第十六條　職工徒弟、職工徒弟タラムトスル者若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工徒弟又ハ職工徒弟タラムトスル者ノ戸籍ニ關シ戸籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條　職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條　工業主ハ工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任スルコトヲ得

工業主本法施行區域内ニ居住セサルトキハ工場管理人ヲ選任スル

コトヲ要ス

工場管理人ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ但シ法人ノ理事、會社ノ業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條　前條ノ工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ルモノトス但シ第十五條ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治産者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事、業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條　第二條乃至第五條、第七條、第九條又ハ第十條ノ規定ニ違反シタル者及第十三條ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條　正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ若ハ其ノ訊問ニ對シ答辯ヲ為サヽル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條　工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違背スル所為ヲ為シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルヽコトヲ得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ為シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルヽコトヲ得ス但シ工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條　本法ニ依ル行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條　主務大臣ハ第一條ニ該當セサル工場ニシテ原動力ヲ用フルモノニ付テハ第九條、第十一條、第十三條、第十四條、第十六條及第十八條乃至第二十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第二十五條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

工場法施行令（大正五年八月三日勅令第百九十三號）

第一章　通則

第一條　左ニ掲クル事業ノミヲ營ム工場ニ付テハ工場法ノ適用ヲ除外ス但シ農商務大臣ノ定ムル原動機ヲ用ヰルモノハ此ノ限ニ在ラス

菓子、飴又ハ麺麭ノ製造

寒天、凍蒟蒻、凍豆腐、湯葉、麺類又ハ麩ノ製造

清酒、濁酒、味淋、燒酎、酢、醬油又ハ味噌ノ製造

行李、籠、籠、和傘骨其ノ他ノ杞柳、籐、竹、藤、經木、蔓、莖又ハ藁ノ手工品ノ製造

經木眞田又ハ麥稈眞田ノ編製

「アタン」、「ハナマ」又ハ之ニ類スルモノヲ以テスル帽子其ノ他ノモノノ編製

扇子、團扇、和傘、又ハ提燈ノ製造

紙、絲、棉、竹又ハ布帛ヲ主タル材料トスル玩具又ハ造花ノ製造

形紙、紙函、元結又ハ水引ノ製造

被服、足袋其ノ他ノ布帛類ノ裁縫

手工ニ依ル組紐ノ編製

刺繍「レース」、「ベテンレース」又ハ「ドローンウオーク」ノ業

第二條　鑛業法ノ適用ヲ受クル工場ニ付テハ工場法ノ適用ヲ除外ス

第三條　左ニ掲クル事業ヲ營ム工場ハ工場法第一條第一項第二號ニ該當スルモノトス

毒劇物又ハ毒劇藥ノ製造
動物ノ剝製
金屬ノ熔融又ハ精煉
水銀ヲ用ヰル計器ノ製造
燐寸ノ製造
火藥、爆藥又ハ火工品ノ製造又ハ取扱
塗料又ハ顔料ノ製造
「エーテル」ノ製造
溶劑ヲ用ヰル護謨製品ノ製造
脂肪油ノ精製
溶劑ヲ用ヰル油脂ノ採收
「ボイル」油ノ製造
礦油ノ蒸溜又ハ精製
乾燥油又ハ溶劑ヲ用ヰル擬革紙布又ハ防水紙布ノ製造

亞硫酸瓦斯、鹽素瓦斯又ハ水素瓦斯ヲ用ヰル事業
金屬、骨、角又ハ貝殼ノ乾燥研磨
硝子ノ製造、腐蝕砂吹又ハ粉碎
織物又ハ編物ノ起毛
製棉
麻ノ梳解
其ノ他ノ他農商務大臣ノ命令ヲ以テ指定シタル事業

第二章　職工又ハ其ノ遺族ノ扶助

第四條　職工業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ當該職工ノ重大ナル過失ニ因ルコトヲ證明シタル場合ヲ除クノ外本章ノ規定ニ依リ扶助ヲ爲スヘシ但シ扶助ヲ受クヘキ者民法ニ依リ同一ノ原因ニ付損害賠償ヲ受ケタルトキハ工業主ハ扶助金額ヨリ其ノ金額ヲ控除スルコトヲ得

前項扶助ノ義務ハ別段ノ定メアル場合ヲ除クノ外職工ノ解雇ニ因リテ變更セラルコトナシ

第五條　職工負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ工業主ハ其ノ費用ヲ以テ療養ニ必要ナル費用ヲ負擔スヘシ

第六條　職工療養ノ爲勞務ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金ヲ受ケサルトキハ工

業主ハ職工ノ療養中一日ニ付賃金二分ノ一以上ノ扶助料ヲ支給スヘシ但シ其ノ支給引續キ三月以上ニ渉リタルトキハ其ノ後ノ支給額ヲ賃金三分ノ一迄ニ減スルコトヲ得

第七條 職工ノ負傷又ハ疾病治癒シタル時ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スル程度ノ身體障害ヲ存スルトキハ工業主ハ左ニ掲クル區別ニ依リ扶助料ヲ支給スヘシ

一 終身自用ヲ辨スルコト能ハサルモノ　賃金百七十日分以上

二 終身勞務ニ服スルコト能ハサルモノ　賃金百五十日分以上

三 從來ノ勞務ニ服スルコト能ハサルモノ、健康舊ニ復スルコト能ハサルモノ又ハ女子ノ外貌ニ醜痕ヲ殘シタルモノ　賃金百日分以上

四 身體ヲ傷害シ舊ニ復スルコト能ハスト雖引續キ從來ノ勞務ニ服スルコトヲ得ルモノ　賃金三十日分以上

第八條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ遺族ニ賃金百七十日分以上ノ遺族扶助料ヲ支給スヘシ

第九條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ葬祭ヲ行フ遺族ニ十圓以上ノ葬祭料ヲ支給スヘシ

第十條 遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ職工ノ配偶者トス

配偶者ナキ場合ニ於テ遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ職工死亡當時之ト同一ノ家ニ

在リタル職工ノ直系卑屬又ハ直系尊屬トシ其ノ順位ハ親等ノ近キ者ヲ先ニシ卑屬ト尊屬ト親等相同シキトキハ卑屬ヲ先ニス

第十一條 前條第二項ニ定メタル同順位者ノ間ニ在リテハ其ノ順位ハ左ノ規定ニ依ル

一 職工ノ家督相續人又ハ戸主ハ之ヲ他ノ者ヨリ先ニス

二 男ハ之ヲ女ヨリ先ニス

三 直系卑屬ニ付テハ男又ハ女ノ間ニ在リテハ嫡出子ヲ先ニシ嫡出子、庶子及私生子ノ間ニ在リテハ嫡出子及庶子ハ女ト雖之ヲ私生子ヨリ先ニス

四 前二號ニ掲クル事項ニ付相同シキ者ノ間ニ在リテハ年長者ヲ先ニス

第十二條 第十條ノ規定ニ該當スル者ナキ場合ニ於テハ左ニ掲クル者ノ中一人ニ遺族扶助料ヲ支給スヘシ但シ職工ノ遺言又ハ工業主ニ對シテ爲シタル豫告ニ依リ左ニ掲クル者ノ中一人ヲ特ニ指定シタルトキハ之ニ從フヘシ

一 職工ノ家督相續人又ハ戸主

二 職工ノ兄弟姉妹ニシテ職工死亡當時之ト同一ノ家ニ在リタル者

三 職工ノ親族又ハ職工ト同一ノ家ニ在ル者ニシテ職工死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者

第十三條 第六條ノ規定ニ依ル扶助料ハ毎月一回以上之ヲ支給スヘシ第五條ノ規

定ニ依ル費用ヲ本人ニ支給スル場合亦同シ

第十四條 第五條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受クル職工療養開始後三年ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治癒セサルトキハ工業主ハ賃金百七十日分以上ノ扶助料ヲ支給シ以後本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得

第十五條 工業主ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得

一 職工ノ解雇後一年ヲ經過シテ扶助ヲ請求スルトキ但シ既ニ受ケタル扶助ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スルトキハ此ノ限ニ在ラス解雇前ニ又ハ解雇後一年内ニ請求シタル扶助ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ請求スルトキ亦同シ

二 扶助ヲ受ケテ治癒シタル負傷又ハ疾病カ職工ノ解雇後ニ於テ再發スルトキ

第十六條 第六條乃至第八條及第十四條ノ規定ニ依ル扶助料算出ノ標準トスヘキ賃金ハ左ノ各號ノ金額トス

一 定額ニ依リ賃金ヲ定ムル場合ニ於テハ其ノ賃金ノ額

二 稼高又ハ就業時間ニ依リ賃金ヲ定ムル場合ニ於テハ疾病ニ在リテハ診斷ニ據ル發病ノ日ヲ除キ發病ノ日明ナラサルトキハ診斷前七日ヲ除キ負傷又ハ卽死ニ在リテハ事故發生ノ日ヲ除キ其ノ前就業三十日分ノ賃金ノ平均額但

シ就業三十日ニ滿タサルトキハ其ノ賃金ノ平均額トス

三 前二項ノ規定ニ依リテ金額ヲ算出スルコトヲ得サル場合ニ於テハ扶助規則ニ於テ定ムル金額但シ扶助規則ニ定メナキトキハ地方長官之ヲ定ム

第十七條 前條第一號又ハ第二號ノ規定ニ依リ金額ヲ算出スル場合ニ於テ工業主カ食事其ノ他ノ給與ヲ支給スルトキハ其ノ價額ハ之ヲ金額中ニ加算ス

第十八條 地方長官ハ職權ヲ以テ又ハ申請ニ因リ職工ノ負傷、疾病若ハ死亡ノ原因、第七條各號ニ掲クル身體障害ノ程度其ノ他扶助ニ關スル事項ニ付之ヲ審査シ及事件ノ調停ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷又ハ檢案セシムルコトヲ得

第十九條 工業主ハ扶助規則ヲ作成シ扶助ノ金額、手續其ノ他扶助ニ關シ必要ナル事項ヲ定メ之ヲ地方長官ニ屆出ツヘシ扶助規則ヲ變更セシムトスルトキ亦同シ地方官必要ト認ムルトキハ扶助規則ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第二十條 官立工場ニ於ケル職工ノ扶助ニ付テハ別ニ定ムル規程ニ依ル

第三章 職工ノ雇入、解雇及周旋

第二十一條 工業主ハ職工名簿ヲ調製シ工場毎ニ之ヲ備付クヘシ

職工名簿ニ記載スヘキ事項ニ關シテハ農商務大臣ノ定ムル所ニ依ル

第二十二條 職工ニ給與スル賃金ハ通貨ヲ以テ毎月一回以上之ヲ支給スヘシ

第二十三條 工業主ハ職工ノ死亡若ハ解雇ノ場合又ハ農商務大臣ノ定ムル場合ニ於テ權利者ノ請求アリタルトキハ遅滯ナク賃金ヲ支給スヘシ

前項ノ場合ニ於テ積立金、信認金其ノ他何等ノ名義ヲ用ヰルニ拘ラス職工ノ貯蓄金ハ遅滯ナク之ヲ返還スヘシ

第二十四條 工業主ハ職工ノ雇入ニ關シ前二條ノ規定ニ違反スル契約又ハ工業主ノ受クヘキ違約金ヲ定メ若ハ損害賠償額ヲ豫定スル契約ヲ爲スコトヲ得ス但シ左ノ事項ニ付豫メ方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

一 職工ニ貯蓄ヲ爲サシメ又ハ職工ノ利益ノ爲賃金ノ一部ニ代ヘ他ノ給付ヲ爲スコト

二 職工カ雇入契約ニ違反シ其ノ他職工ノ責ニ歸スヘキ事由ニ因リ解雇セラルル場合ニ於テ職工ノ貯蓄金中工業主ノ給與ニ係ル部分ヲ交付セサルコト

第二十五條 職工ノ貯蓄金ヲ管理スル場合ニ於テハ工業主ハ豫メ確實ナル方法ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十六條 尋常小學校ノ教科ヲ修了セサル學齢兒童ヲ雇傭スル場合ニ於テハ工業主ハ就學ニ關シ必要ナル事項ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

第二十七條 未成年者若ハ女子カ工業主ノ都合ニ依リ解雇セラレ又ハ第五條若ハ

第六條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受クル職工若ハ第七條第一號第二號ニ該當スル職工解雇セラレ解雇ノ日ヨリ十五日内ニ歸郷スル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ必要ナル旅費ヲ負擔スヘシ第十四條ノ規定ニ依リ扶助ヲ廢止セラレタル者廢止ノ日ヨリ十五日内ニ歸郷スル場合亦同シ

第十八條ノ規定ハ前項ノ旅費ニ關シ之ヲ準用ス

第四章 徒弟

第二十八條 工場ニ收容スル徒弟ハ左ノ各號ノ條件ヲ具備スルコトヲ要ス

一 一定ノ職業ニ必要ナル知識技能ヲ習得スルノ目的ヲ以テ業務ニ就クコト

二 一定ノ指導者指揮監督ノ下ニ教習ヲ受クルコト

三 品性ノ修養ニ關シ常時一定ノ監督ヲ受クルコト

四 地方長官ノ認可ヲ受ケタル規程ニ依リ收容セラルルコト

第二十九條 工業主前條第四號ノ認可ヲ申請スルニハ左ノ事項ヲ具備スヘシ

一 徒弟ノ員數

二 徒弟ノ年齢

三 指導者ノ資格

四 教習ノ事項及期間

五 就業ノ方法及一日ニ於ケル就業ノ時間

六　休日及休憩ニ關スル事項
七　品性修養ニ關スル監督ノ方法
八　給與ノ方法
九　第三十條ノ規定ニ依リ設クル規程
十　徒弟契約ノ條項

第三十條　徒弟未成年者又ハ女子ナル場合ニ於テハ其ノ就業ニ付十五歳未滿ノ者又ハ女子ニ關スル工場法ノ規定ニ準據シテ危險ヲ避ケ及衛生上ノ害ヲ防クノ方法ヲ定ムヘシ

第三十一條　地方長官ハ工業主ニ於テ第二十八條第四號ノ規程ニ違ハス又ハ徒弟教習ノ目的ヲ完クスルコト能ハスト認ムルトキハ之ヲ矯正スル爲必要ナル事項ヲ命シ又ハ第二十八條第四號ノ認可ヲ取消スコトヲ得

第三十二條　第二十八條ノ條件ヲ具備セサル者ニ對シテハ工業主ニ於テ徒弟ノ名義ヲ用ヰルニ拘ラス職工ニ關スル工場法及本令ノ規定ヲ適用ス第二十八條第四號ノ認可ヲ取消サレタルトキ從來ノ徒弟ニ付亦同シ

第五章　罰則

第三十三條　工業主左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

一　地方長官ノ爲シタル扶助規則變更ノ命令ニ違反シタルトキ
二　職工ノ雇入ニ付詐術ヲ用ヰタルトキ
三　第二十四條ニ違反シ又ハ同條但書ノ規定ニ依ル許可ノ條件ニ違反シタルトキ
四　不正ニ扶助義務ノ全部ハ若ハ一部ヲ免レ又ハ免レムトスルノ所爲ヲ爲シタルトキ
五　不正ノ賃金支拂ノ義務職工ノ貯蓄金返還ノ義務又ハ第二十七條第一項ノ規定ニ依ル義務ノ全部又ハ一部ヲ免レ又ハ免レムトスルノ所爲ヲ爲シタルトキ
六　第二十五條ノ認可ヲ受ケス又ハ認可ヲ受ケタル方法ニ依ラスシテ職工ノ貯蓄金ヲ管理シタルトキ
七　第二十六條ノ認可ヲ受ケスシテ尋常小學校ノ教科ヲ修了セサル學齡兒童ヲ雇傭シタルトキ
八　第二十八條第四號ノ規程又ハ第三十一條ノ規定ニ依ル地方長官ノ命令ニ違反シタルトキ

工業主ノ爲ニスル職工ノ雇入ニ付詐術ヲ用ヰタル者又ハ工業主ヲシテ不正ニ前項第四號若ハ第五號ニ揭クル義務ノ全部若ハ一部ヲ免レシメ若ハ免レシメムト

スルノ所爲ヲ爲シタル者ハ罰前項ニ同シ但シ其ノ者ノ所爲ニ付工場法第二十二條ノ規定ニ依リ工業主又ハ之ニ代ル者ヲ罰スヘキ場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第三十四條 職工ノ周旋ニ付詐術ヲ用ヰタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條 工業主左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 職工名簿ノ調製又ハ備付ヲ怠リタルトキ

二 扶助規則ノ作成若ハ屆出ヲ怠リタルトキ

三 通貨ニ非ラサルモノヲ以テ賃金ヲ支拂ヒタルトキ

第三十六條 本令ニ規定スル所爲カ同時ニ刑法其ノ他ノ法令ノ罰則ノ規定ニ觸ルル爲其ノ所爲ヲ爲シタル工業主又ハ之ニ代ル者ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニ對シ刑法其ノ他ノ法令ヲ適用スル場合ニ於テモ工業主又ハ之ニ代ル者ニ對シ本令ヲ適用スルコトヲ妨ケス

附　則

第三十七條 本令大正五年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十八條 第二十四條ノ規定ハ本令施行後一年間本令施行前ノ契約ニ之ヲ適用セス

賃金ノ支拂期ニ關シ第二十二條ノ規定ニ異ル慣習アルトキハ工業主ハ地方長官

ノ許可ヲ受ケ本令施行後三年內其ノ慣習ニ依ル支拂期ヲ延長セサル限度ニ於テ支拂期ヲ定ムルノ契約ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 本令施行ノ際工場法ノ適用ヲ受クル工業主ハ本令施行ノ日ヨリ四月內ハ第十九條、第二十一條、第二十二條、第二十五條及第二十六條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

本令施行ノ際職工ノ貯蓄金ヲ管理シ又ハ尋常小學校ノ敎科ヲ修了セサル學齡兒童ヲ雇傭シ若ハ徒弟トシテ收容スル工業主前項ノ期間內ニ第二十五條、第二十六條又ハ第三十條第二項ノ規定ニ依ル認可ヲ申請シタルトキハ之ニ對スル行政處分アル迄仍從前ノ例ニ依ルコトヲ得

前項ノ規定ハ前條第二項ノ許可ノ申請ニ付之ヲ準用ス

第四十條 現行ノ命令ハ工場法又ハ本令ニ抵觸セサル限リ本令施行ノ爲其ノ效力ヲ妨ケラルルコトナシ

第四十一條 本令ニ定ムルモノノ外主務大臣及地方長官ハ職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締其ノ他本令施行ノ爲必要ナル事項ニ關シ命令ヲ發スルコトヲ得

第四十二條 本令中地方長官トアルハ東京府ニ於テハ警視總監トス

工場法施行規則

（大正五年八月三日農商務省令第十九號）

第一條　工場法施行令第一條ノ規定ニ依ル原動機ハ蒸汽機關、蒸汽タービン、瓦斯機關、石油機關、タービン水車、ペルトン水車及電動機トス

第二條　工場法第二條第二項ノ規定ニ依ル許可ノ申請ハ地方長官ニ之ヲ爲スヘシ

同法第八條ノ規定ニ依ル許可若ハ認可ノ申請又ハ屆出ニ付亦同シ

第三條　器械生絲製造ノ業務及地方長官ノ告知シタル工場ニ於ケル輸出絹織物ノ業務ニ付テハ工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ノ一日ノ就業時間ヲ工場法施行後五年間ハ十四時間迄其ノ後十年間ハ十三時間迄延長スルコトヲ得

織物及編物ノ業務ニ付テハ工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ノ一日ノ就業時間ヲ工場法施行後二年間ハ十四時間迄延長スルコトヲ得

第四條　工場法第五條第一項ニ掲クル業務ノ種類左ノ如シ

一　魚介ノ罐詰、壜詰、鹽藏、燻製、煮乾其ノ他腐敗又ハ變質ヲ防止スルニ必要ナル業務

果實ノ罐詰又ハ果實酒ノ釀造ニ關スル業務

二　新聞紙ノ印刷ニ關スル業務

第五條　工場法第九條ニ掲クル業務ノ範圍左ノ如シ

一　原動機、電氣機械其ノ他ノ機械又ハ動力傳導裝置ニ附屬スル勞輪、曲柄（クランク）、連接桿（コンネクチングロッド）、聯桿器（クロスヘッド）、喞子桿（ピストンロッド）、發電機ノ「コンミュテーター」、轉子、鋭利ナル刃物、齒輪、調帶車、車軸、車軸接手（カップリング）又ハ之ニ準スヘキ危險ナル部分ヲ其ノ運轉中ニ掃除、注油、檢査又ハ修繕スル業務

二　危險ナル方法ニ依リ運轉中ノ機械又ハ動力傳導裝置ニ調帶調索ノ取附ケ又ハ取外シヲ爲ス業務

三　汽罐ノ焚火、給水弁、阻汽弁ノ開閉又ハ安全弁ノ取扱

四　發電機、電動機、發電機ノ抵抗器若ハ變壓器ノ取扱又ハ高壓電線ノ接續

五　鋸機ニ木材ヲ送給スル業務

六　危險ナル齒輪、調帶車、勞輪、調帶、調索ニシテ完全ナル柵圍其ノ他危害豫防裝置ナキモノ又ハ之ニ準スヘキモノニ接近シテ行フ業務

七　完全ナル柵圍其ノ他ノ危害豫防裝置ナキ車軸道、足場其ノ他之ニ準スヘキ場所ニ於ケル業務

第六條　工場法第十條ニ掲クル業務ノ範圍左ノ如シ

一　砒素若ハ水銀又ハ其ノ化合物、黃燐、硫化燐、チアン水素酸「チアンカリウム」、フルオール水素酸、硫酸、硝酸、鹽酸、苛性ナトロン、石炭酸其ノ他之ニ準スヘキ毒劇性料品ヲ取扱フ業務

二　「カリウム」、「ナトリウム」、過酸化ナトリウム、「エーテル」、石油「ベンヂン」、「アルコホル」、二硫化炭素其ノ他之ニ準スヘキ發火性又ハ引火性ノ料品ヲ取扱フ業務

三　火藥、爆藥又ハ火工品ヲ取扱フ場所ニ於ケル業務

四　金屬、鑛物、土石、骨、角、獸毛、棉、麻、藁等ノ塵埃粉末ヲ著シク飛散スル場所ニ於ケル業務

五　砒素、水銀、黃燐、鉛、チアン水素酸、「フルオール」、「アニリン」、「クロローム」、若ハ「クロール」又ハ其ノ化合物其ノ他之ニ準スヘキ有害料品ノ粉塵、蒸氣若ハ瓦斯又ハ酸性瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務

六　多量ノ高熱物體ヲ取扱フ業務又ハ金屬、鑛物、土石類ノ熔融若ハ煆燒ヲ爲ス高熱ノ場所、高熱ノ乾燥室其ノ他之ニ準スヘキ場所ニ於ケル業務

第七條　工場法第十條ノ規定ハ前條第五號及第六號ニ掲クル業務ニ關シ十五歲以上ノ女子ニ付之ヲ適用ス

第八條　工業主ハ左ニ掲クル疾病ニ罹レル者ヲシテ就業セシムルコトヲ得ス但シ第四號又ハ第五號ニ掲クル疾病ニ罹レル者ニ付傳染豫防ノ處置ヲ爲シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一　精神病

二　癩、肺結核、喉頭結核

三　丹毒、再歸熱、麻疹、流行性腦脊髓膜炎其ノ他之ニ準スヘキ急性熱性病

四　黴毒、疥癬其ノ他傳染性皮膚病

五　膿漏性結膜炎、「トラホーム」（著シク傳染ノ虞アルモノ）其ノ他之ニ準スヘキ傳染性眼病

工業主ハ肋膜炎、心臟病、脚氣、關節炎、腱鞘炎、急性泌尿生殖器病其ノ他ノ疾病ニ罹レル者ニシテ就業ノ爲病症增惡ノ虞アル場合ハ之ヲ就業セシムルコトヲ得ス

工業主ハ傳染病又ハ重大ナル疾病ニ罹レル者ニシテ其ノ症候消失シタル後ト雖健康ノ回復セサル場合ハ之ヲ就業セシムルコトヲ得ス但シ醫師ノ意見ヲ徵シ支障ナシト認ムル業務ニ就カシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第九條　工業主ハ產後五週日ヲ經過セサル者ヲシテ就業セシムルコトヲ得ス但シ產後三週日ヲ經過シタル後醫師ノ意見ヲ徵シ支障ナシト認ムル業務ニ就カシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十條　地方長官ハ前二條ニ揭クル場合ノ外工業主ニ對シ病者又ハ產婦ノ就業ノ制限又ハ禁止ヲ命スルコトヲ得

第十一條　工場法第十四條ノ規定ニ依ル證票ハ樣式第一號ニ依ル

第十二條　工業主ハ就業時間、休憩及休日ニ關スル事項ヲ工場內ノ見易キ場所ニ揭

示スヘシ

第十三條　工場主ハ扶助ニ關スル事項ノ要領ヲ平易ニ記述シ適宜ノ方法ヲ以テ之ヲ職工ニ周知セシムヘシ

第十四條　職工就業中又ハ工場及附屬建設物內ニ於テ負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ遲滯ナク醫師ヲシテ診斷又ハ檢案ヲ爲サシムヘシ

第十五條　工場法施行令第十六條第一號ノ定額又ハ第十七條ノ給與ノ算出方法ニ關シ契約又ハ慣習ナキ場合ニ於テ年ヲ以テ定メタルトキハ三百六十分シ月ヲ以テ定メタルトキハ三十分シテ一日ノ賃金又ハ給與ヲ定ム

第十六條　職工名簿ノ記載ハ樣式第二號ノ定ムル所ニ依ルヘシ

第十七條　職工名簿ノ用紙ハ職工ノ死亡又ハ解雇後五年間之ヲ保存スヘシ

第十八條　工業主カ其ノ職工ニ付工場間ニ又ハ工職ト工場外トノ間ニ所屬ノ移動ヲ行ヒタル場合ニ於テハ職工名簿ノ記載ニ付雇入又ハ解雇アリタルモノト看做ス

第十九條　職工ノ雇入及扶助ニ關スル書類ハ工場毎ニ之ヲ備置クヘシ

前項ノ雇入ニ關スル書類ハ職工ノ解雇又ハ死亡ノ日ヨリ三年間、扶助ニ關スル書類ハ扶助ヲ終リタル日ヨリ三年間、之ヲ保存スヘシ

第二十條　工場法施行令第二十三條ノ規定ニ依リ工業主カ賃金ヲ支拂ヒ又ハ職工

ノ貯蓄金ヲ返還スヘキ場合左ノ如シ

一　職工カ一月以上ニ渉リテ歸郷スルトキ

二　職工カ婚禮又ハ婚儀ヲ行フ費用ニ充ツルトキ

三　其ノ他地方長官ノ命令ヲ以テ定メタル場合

第二十一條　工業主工場管理人選任ノ認可ヲ申請セシムルトキハ申請書ハ其ノ履歴書ヲ添ヘ之ヲ地方長官ニ差出スヘシ

第二十二條　工業主ハ左ノ場合ニ於テハ遅滞ナク地方長官ニ届出ツヘシ

一　工場法第十八條第三項但書ニ依リ工場管理人ヲ選任シタルトキ

二　工場管理人死亡シ又ハ之ヲ解任シタルトキ

三　第十七條又ハ第十九條第二項ノ規定ニ依リ保存スヘキ書類ヲ滅失又ハ毀損シタルトキ

第二十三條　工業主扶助規則ヲ變更セムトスルトキハ其ノ事項ヲ一月前ニ地方長官ニ届出ツヘシ

第二十四條　常時五十人以上ノ職工ヲ使用スル工場ニ於ケル職工ノ疾病負傷又ハ死亡ニ付テハ工業主ハ様式第三號ノ定ムル所ニ依リ毎月取纏メ翌月二十日迄ニ地方長官ニ届出ツヘシ

第二十五條　第八條、第九條、第十二條乃至第十四條、第十六條、第十七條又ハ第十九條

ノ規定ニ違反シタル者第十條ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者及職工名簿ノ記載ヲ怠リ又ハ之ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十六條　第二十二條乃至第二十四條ノ届出ヲ怠リ又ハ其ノ届書ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十七條　本則ニ規定スル所爲カ同時ニ刑法其ノ他ノ法令ノ罰則ノ規定ニ觸ルル爲其ノ所爲ヲ爲シタル工業主又ハ之ニ代ル者ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニ對シ刑法其ノ他ノ法令ヲ適用スル場合ニ於テモ工業主又ハ之ニ代ル者ニ對シ本則ヲ適用スルコトヲ妨ケス

附　則

第二十八條　本則ハ大正五年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十九條　本則施行ノ際工場法ノ適用ヲ受クル工場ノ工業主ハ本則施行ノ日ヨリ四月内ハ第十二條、御十三條及第二十四條ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

第三十條　工場法施行ノ際十歳以上十二歳未滿ノ者ヲ引續キ就業セシムル工業主ハ大正五年九月三十日迄ニ其ノ氏名男女別生年月日及雇入年月ヲ地方方長官ニ届出ツヘシ

前項ノ届出ヲ怠リタル者又ハ其ノ届書ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第三十一條　本則中地方長官トアルハ東京府ニ於テハ警視總監トス

（樣式第一號）

第　號　大正　年　月　交附

官職氏名　農商務省又ハ廳府縣印

工場法第十四條　當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

工場法第二十一條　正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ又ハ其ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲ササル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

竪二寸五分横三寸中央點線ノ所ヨリ二ツ折ト爲シ表面ニ「工場臨檢票」ト記ス

（樣式第二號）

男女	氏名	生年月日	本籍	住所	履歴	雇入	解雇	雜

職工名簿記載心得

一　職工名簿ハ職工毎ニ少クトモ用紙一枚ヲ備ヘ其ノ體裁ハカード式其ノ他ノ方式ニ依リ工業主ノ便宜ニ從ヒ之ヲ定ムヘシ

二　工業主ノ都合ニ依リ本様式各欄ノ間隔ヲ伸縮シ、各欄内ニ別ニ欄ヲ設ケ又ハ各欄以外ノ欄ヲ設クルコトヲ妨ケス

各欄ノ位置ハ本様式ニ掲クル順序ニ依ルヘシ但シ本則施行ノ際使用スル職工名簿ニ付テハ新名簿調製ニ至ル迄ノ間從前ノ順序ニ依ルコトヲ得

三　職工名簿ハ職工ノ業務別、男女別又ハ女工及十五歳未滿ノ男工ト其ノ他ノ職工トヲ區別スル等便宜ニ從ヒ各別ニ之ヲ調製スルコトヲ妨ケス

四　履歴欄ニハ職工ノ學業及業務上ノ履歴ノ概略ヲ記載スヘシ

五　雇入欄ニハ雇入又ハ雇入更新ノ年月日、雇入期間ノ定アルモノハ其ノ期間其ノ他雇入ニ關シ重要ナル事項ヲ記載スヘシ

六　解雇欄ニハ解雇ノ年月日、事由其ノ他解雇ニ關シ重要ナル事項ヲ記載スヘシ

職工死亡シタルトキハ本欄ニ其ノ年月日、死亡ノ原因、死亡ニ至ル迄ノ經過ヲ記載スヘシ

七　雜欄ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

イ　女子及十五歳未滿ノ男工カ同一日ニ於テ他工場ニモ就業スル場合ニ於テハ他工場ニ於ケル就業時間（工場法第三條第三項）

ロ　職工カ遺族扶助料ヲ受クヘキ者ヲ豫告シタルトキハ其ノ氏名、住所、職工トノ關係及豫告ノ年月日（工場法施行令第十二條但書）

尙本欄ニハ工業主ニ於テ必要ト認ムル雜件ヲ記載スルモノトス

八　各票作成ハ當務者ハ雜欄其ノ他便宜ノ場所ニ作成ノ年月日ヲ記載シ署名又ハ捺印スヘシ

（様式第三號）

大正　年
月分　職工負傷疾病月報

工場名

職工總數

課内　男工　女工

氏名	生年月	業務別 男女別	休業日數	病名又ハ負傷ノ種類	發病又ハ負傷ノ日附	結 治癒ノ日	結 死亡ノ日	結 解雇ノ日	未 未治療ノ爲整月ヘ繰越
									○
									○
									○
									○
									○

職工負傷疾病月報記載心得

一　本月報用紙ノ一頁ハ半紙半折大トス

二　本月報ニハ業務上ト否トヲ問ハス負傷又ハ疾病ノ爲引續キ三日又ハ夫レ以上休業シタル者ニ限リ記載スヘシ但シ死亡シタル者ニ付テハ休業三日ニ滿タサルトキト雖之ヲ記載スヘシ

同一職工ニ付同一月内ニ二回以上月報ニ記載スヘキ事由ヲ生シタルトキハ各別ニ記載スヘシ

三　負傷及疾病ハ各別ニ取纒メテ記載スヘシ負傷ト疾病ト用紙ヲ別ニスルモ妨ナシ

四　職工總數欄ニハ其ノ月ノ末日ニ使用スル職工ノ總數ヲ記載スヘシ

五　業務別男女別欄ニハ例ヘハ紡績工場ニ於テハ混棉部男工、精紡部女工、製紙工場ニ於テハ紙料部男工、織布工場ニ於テハ整經部女工等ニ準シ記載スヘシ

六　休業日數欄ニハ其ノ月ニ於ケル休業日數ヲ記載スヘシ

月末ノ休業日數カ三日ニ滿タサルモ翌月ノ分ト合算シテ三日又ハ夫レ以上トナリタル場合ニ於テハ之ヲ通算シテ翌月ノ月報ニ記載スヘシ

未治療ノ爲翌月ヘ繰越欄ニ記載シタルモノニシテ翌月ニ入リ治療シタルトキハ翌月ニ於ケル休業三日ニ滿タスト雖仍之ヲ翌月ノ月報ニ記載スヘシ

七　病名又ハ負傷ノ種類、發病又ハ負傷ノ日附判明セサルトキハ「不明」ト記載スヘシ

八　結末欄ニ於テハ其ノ月内ニ治療シタル者ハ治療ノ日附、其ノ月内ニ死亡シ又ハ治療ニ至ラスシテ解雇シタル者ハ死亡又ハ解雇ノ日附ヲ記載シ其ノ月内ニ治療セサル者ニ付テハ未治療ノ爲整月ヘ繰越欄ニ〇印ヲ附スヘシ

改訂
增補

工場法論

目次

第一編　日本工場法……一

第一章　工場法制定ノ沿革……一

第一節　第一期……二

第二節　第二期……一二

第三節　第三期……五七

第四節　第四期……八八

第一項　施行ニ至ル迄ノ經過……八八

第二項　工場法施行令……一〇一

第三項　工場法施行規則……一〇四

第五節　餘論……一二五

第二章　工場法制定以前ニ於ケル工場取締……一四四

第一節　緒言……一四四
第二節　工場ノ建設……一四六
第一項　一般規定ノ事例……一五一
第二項　特別規定ノ事例……一五七
第三項　工場ノ臨檢……一六三
第三節　汽機汽罐ノ取締……一六六
第四節　職工雇入及傭使……一六八
第一項　職工ノ傭入……一七〇
第二項　職工ノ傭使……一七四
第五節　道府縣汽罐汽機製造所及職工募集ニ關スル取締規則……一八〇
第六節　汽罐汽機原動機各種工場及職工取締ニ關スル職員及經費……一九二
第七節　鑛夫ノ傭使……二〇〇
第八節　餘論……二〇三

第三章　工場法制定ノ根據……二〇六

第一節　總論……二〇六
第二節　健康障害……二一二
第一項　總論……二一二
第二項　罹病及其ノ原因……二三一
第三項　罹災及其ノ原因……二四三
第三節　風紀……二四六
第四節　傷病死者ノ扶助……二四九
第五節　雇入解雇及周旋ニ關スル弊害……二五二
第六節　結論……二五四

第四章　工場法令ノ内容……二五七

第一節　工場ノ概念……二五七
(附)　工場ノ意義ニ關スル參考資料……二七七
第二節　職工ノ概念……二八七
(附)　職工ノ意義ニ關スル參考資料……二九八
第三節　工場法ノ通用範圍……三〇八
第一項　概論……三〇八
第二項　適用工場……三一四
第三項　適用ノ除外……三三四
第四項　適用範圍ノ決定並適用開始及終了ノ時期……三六〇
第五項　官立及公立工場……三七二
第六項　家内工場……三七三
第四節　就業制限……三八四

第一項　保護職工ノ範圍……三八四
第二項　時間ニ關スル制限……四〇八
第三項　就業制限……四二六
第四項　就業制限ニ關スル例外規定……四五一
第五項　夜業禁止問題……四八八
第五節　設備ノ取締……五四三
第六節　扶助……五七二
第一項　概論……五七二
第二項　扶助義務ノ發生……六〇四
第三項　扶助義務ノ性質……六一五
第四項　扶助の種類及範圍……六一八
第五項　扶助の支給……六三二
第六項　扶助ノ請求(審査及調停)……六四五
第七項　扶助債權ノ消滅及變更……六五二

第八項　扶助規則及扶助ニ關スル書類……六六二
第九項　官立工場ニ於ケル職工ノ扶助……六六五
第七節　雇入解雇及周旋……六八一
第一項　概論……六八一
第二項　職工名簿……六八二
第三項　戸籍ニ關スル證明……六八八
第四項　賃金ノ支拂……六九一
第五項　貯蓄金……七〇〇
第六項　損害賠償額ノ豫定及違約金……七〇七
第七項　學齢兒童……七一一
第八項　歸郷旅費ノ支給……七二一
第九項　職工ノ募集及周旋……七二五
第八節　徒弟……七三二
第一項　概論……七三二

第二項　徒弟ノ要件……七四八
第三項　徒弟ノ收容……七五二
第四項　徒弟ノ就業……七五八
第五項　徒弟ノ扶助……七六〇
第九節　臨檢及制裁……七六〇
第十節　工場管理人……七六四
第一項　概論……七六四
第二項　工場管理人ノ選任……七六五
第三項　工場管理人ノ性質及權限……七六七
第十一節　認可許可届出及其ノ他ノ事項……七六九
第一項　概論……七六九
第二項　認可許可及届出……七七〇
第三項　其ノ他ノ事項……七七四
第十二節　罰則……七七五

第十三節　訴願及訴訟……七八一
第一項　訴願……七八一
第二項　行政訴訟……七八二

第五章　工場設備……七八四

第一節　概論……七八四
第二節　工場災害……七八八
第一項　概論……七八八
第二項　工場災害ノ原因……七九三
第三項　工場災害ノ防止……八〇〇
第三節　工場ノ火災……八一五
第一項　概論……八一五
第二項　失火ノ原因ト其ノ防止……八一六
第三項　延燒ノ原因ト其ノ防止……八一九

第四項　消防不成功ノ原因ト其ノ防止……八二〇
第五項　人命亡失ノ原因ト其ノ防止……八二一
第四節　工場ノ採光及照明……八二三
第一項　概論……八二三
第二項　採光照明ノ適否ト其ノ影響……八二四
第三項　日光ノ特徴ト採光方法……八二六
第四項　燈火及照明方法……八二七
第五節　工場衛生……八三一
第一項　概論……八三一
第二項　一般的清潔法……八三二
第三項　保健施設……八三四
第四項　汚物癈物ノ處理……八三七
第六節　換氣……八四一
第一項　概論……八四一

第二項　換氣法……八四五
第三項　機械換氣……八五一
第四項　空氣試驗……八五三
第七節　粉塵及粉塵ヲ發散スル業務……八五六
第一項　概論……八五六
第二項　著シク粉塵ヲ發散スル工業……八六一
第三項　防塵……八六七
第八節　有害料品ト工業中毒……八七五
第一項　劇毒物有害瓦斯及蒸氣竝其ノ影響……八七六
第二項　有害工業……八八五
第三項　中毒豫防……八八九
第九節　餘論……八九四

第六章　工場管理法……九〇三

第一節　勞働時間問題……九〇三
第一項　勞働時間問題ノ發生……九〇三
第二項　幼少者及女子ノ勞働時間問題ト成年男工ノ時間問題……九〇六
第三項　勞働者ノ地位向上ヲ主トスル勞働時間問題ノ趨勢……九〇七
第四項　勞働能率ヲ主トスル時間短縮問題……九一二
第二節　學理的工場管理法……九一五
第一項　概論……九一五
第二項　賃銀支拂方法……九一七
第三項　學理的工場管理法……九二四
第三節　精神的工場管理法……九四一

第七章　工場監督……九五〇

第一節　總論……九五〇
第一項　工場監督ノ起原……九五〇
第二項　工場監督官ノ職務權限……九五五
第三項　工場監督機關ノ組織……九五九
第四項　工場監督ノ選任ト其ノ性格……九六六
第五項　工場監督ノ狀況……九七〇
第二節　英國ニ於ケル工場監督……九七四
第一項　工場監督機關……九七四
第二項　監督官ノ權限……九八二
第三項　監督ノ方法……九八五
第四項　工場監督官ノ位置及任用……九九一
第三節　獨逸ニ於ケル工場監督……九九七
第一項　獨逸帝國ノ工場監督……九九七
第二項　普魯西ニ於ケル工場監督……九九九

第一節　日本ニ於ケル工場監督……一〇二五
第一項　工場監督機關……一〇二五
第二項　工場監督官ノ權限……一〇三一
第三項　工場監督官ノ任用……一〇三三
第二編　日本工場法ト外國法トノ比較……一〇三六
第一章　緒論……一〇三六
第二章　英國法トノ比較……一〇四一
第一節　沿革……一〇四一
第二節　內容ノ比較……一〇四六
（附）其ノ他ノ規定……一〇五五
第三章　獨國法トノ比較……一〇五七

第一節　沿革……一〇五七
第二節　內容ノ比較……一〇六一
（附）其ノ他ノ規定……一〇六六
第四章　佛國法トノ比較……一〇六八
第一節　沿革……一〇六八
第二節　內容ノ比較……一〇七一
（附）其ノ他ノ規定……一〇七五
第五章　其ノ他ノ諸國ニ於ケル工場法及勞働者保護ニ關スル國際條約……一〇七六
第六章　工場法ノ規定ト外國工場法ノ規定對照……一〇八三

第一條及第二十四條法律適用ノ範圍ニ關スルモノ……一〇八三
第二條年齡ノ制限ニ關スルモノ……一〇八五
第三條第一項就業時間ニ關スルモノ……一〇八七
第三條第二項就業時間ノ制限ニ對スル例外……一〇九〇
第四條夜間ト稱スル時間及夜業禁止ノ職工……一〇九三
第五條及第六條夜業ノ制限ニ關スル例外……一〇九三
第七條休憩休日及晝夜交替業ニ於ケル兩番ノ轉換ニ關スルモノ……一〇九九
第八條天災事變ノ場合又ハ臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於ケル特例……一一〇一
第九條幼少年工及女子ノ使用ニ關スル特種ノ制限……一一〇三
第十條危險又ハ衞生上有害ノ業務ニ幼少年工及女子ノ使用ヲ禁止スル規定……一一〇四
第十一條危險豫防其ノ他ニ關スルモノ……一一〇六

目次

第十二條産婦ノ使用ノ禁止制限ニ關スルモノ……一一〇八
第十三條職工ノ負傷扶助ニ關スルモノ……一一〇九
第七章 結論……一一一二
附表
千九百十二年度英國職工補償法ニ依ル賠償統計
千九百八年獨逸帝國災害保險統計
獨逸帝國勞働保險成績概表
英國工場監督行政組織ト一般行政組織トノ關係

改訂增補 工場法論

法學士 岡 實 著

第一編 日本工場法

第一章 工場法制定ノ沿革

明治四十四年三月二十八日ヲ以テ制定公布セラレタル工場法ハ、其ノ條文僅ニ二十五箇條、大正五年八月二日ヲ以テ公布セラレタル施行令(四十二箇條及施行規則(三十一箇條)ヲ合スルモ其ノ法條僅ニ九十八條ニ過キス。然レトモ此等ノ法規カ制定セラルル迄ニハ實ニ約三十箇年ノ星霜ヲ積ミ、此ノ間主務大臣ノ交迭ヲ重ヌルコト二十三回、工務局長又ハ商工局長トシテ主任者ヲ換フルコト十五人、稿ヲ更ムルコト亦實ニ百數十回ニ及ヒタルモノナリ、以下其ノ沿革ノ大要ヲ述フヘシ。

第一節　第一期（自明治十四年至明治三十一年）

農商務省ノ内務省ヨリ分離シタルハ實ニ明治十四年四月ニシテ、翌年工務局内ニ調査課ヲ設ケ、勞役法及工場條例ニ關スル材料ヲ集輯センカ爲メ、各府縣ニ移牒シテ、職工及工場ニ係ル現在ノ狀態及慣習等ヲ調査報告セシム。翌十六年ニ至リ諸般ノ參考材料ニ依リ、勞役法、師弟契約法及工場規則ノ立案ニ着手スルト共ニ、之ニ關スル意見ヲ東京商工會ニ諮問シタルニ、工業上傭主被傭者間及師弟間ノ取締ヲ必要ト認ムルヲ以テ、速カニ適當ノ法律ヲ制定セラレンコトヲ希望ストノ答申ニ接シタリ。

翌十七年ニ至リ、當時農商務省ノ諮問機關トシテ特設セラレタル勸業諮問會ノ第一次會合ニ際シ、更ニ工業上傭主被傭者間並師弟間ノ取締法制定ノ可否ニ付意見ヲ諮問シタルニ、同諮問會ハ各地ノ慣習同シカラスト雖、近來種々ノ弊害ヲ生シタルヲ認ムルヲ以テ、各地舊來ノ慣習ニ基キ完全ナル取締法ヲ發布セラレタシト答申セリ。

明治十八年ハ勞役法、師弟契約法、職工並徒弟條例ニ關スル大體調査ヲ繼續シ、翌十九年二月、第三次勸業諮問會ヲ開キ、工業上傭主被傭者間並師弟間ノ權利義務ノ規定及傭役ノ制限等ニ關スル事項ヲ諮詢スルト共ニ、各地方ノ狀態慣例ヲ詳カニスルコトヲ努メタリ。

明治二十年六月ニ至リ、職工條例及職工徒弟條例案一ト先ツ脫稿ス、前案ハ總則、末丁年ノ職工徒弟、工場製造所及罰則ノ五章四十六條ヨリ成リ、後案ハ總則、職工、徒弟及罰則ノ四章三十一條ヨリ成ル、左ニ其ノ要領ヲ掲ケン。

職工條例案規定事項ノ要領

第一章　總則

一職工ト工業製造人ノ關係ハ合意契約ニ依リ定マルコト

一此等二者ノ人權及物權ニ關スル契約ノ條件ヲ制限セサル場合ハ民法ノ規定若ハ地方ノ慣例ニ依ルコト

一工業製造人及職工ノ定義

一水火力ヲ用フル生産所、礦物ノ分析淘汰、礦坑、普請場及造船所等ハ工場製造

所トシテ本條例ヲ適用スルコト

一雇傭契約ノ解除ニ關スルコト

一工業製造人ノ職工ニ對スル契約ノ不履行、及職工ノ工業製造人ニ對スル契約違反ニ因ル損害賠償ノコト

一工業製造人ハ職工ノ解職ニ際シ、其ノ請求ニ應シ無報酬ニテ勤務證書ヲ交附スルコト、又修業ヲ目的トスル者ニハ卒業證書ヲ交附スルコト

一工業製造人ト職工トノ間ノ紛爭ハ商業會議所ニ於テ仲裁スルコト

一工業製造人ハ職工ニ物品ヲ賣渡シ、物品又ハ金錢ヲ貸付ケ利益ヲ收ムルコトヲ得サルコト

一職工ノ賃銀ハ帝國ノ通貨ヲ以テ拂渡スコト

第二章　未丁年ノ職工

一未丁年ノ職工ハ日曜日及大祭日ニ勞役セシメサルコト

一公權ヲ剝奪セラレタル者ハ未丁年ノ職工ヲ使用スルコトヲ得サルコト

一履歴書ヲ所持セサル未丁年者ヲ職工トシテ使用スルコトヲ得サルコト

一工業製造人ハ未丁年職工カ違約行爲ヲ以テ退業スルトキハ其ノ履歴書ヲ留置スル權ヲ有スルコト

一就學義務ヲ了ヘサル者、又ハ就學猶豫ヲ得サル兒童ヲ職工ニ使用スルトキハ工業製造人ハ一定ノ時間ヲ設ケテ通學セシムル義務アルコト

第三章　徒弟

一徒弟ハ工業製造人ノ家族ニ附屬シ、其ノ業法ノ傳習ヲ受ケン爲メニ使用セラルル職工ナルコト

一徒弟ト工業製造人ノ契約ニハ通例一箇月以上三箇月以内ノ試驗期間ヲ設クルコト

一工業製造人カ徒弟ノ承諾ヲ得スシテ解約シ得ル場合ノ規定(七項)

一徒弟カ工業製造人ノ承諾ヲ得ルヲ要セスシテ其ノ契約ヲ解キ得ル場合ノ規定(五項)

一徒弟ノ契約ハ徒弟又ハ父母、後見人ヨリ其ノ營業ヲ變更スルノ事由ヲ以テ解除ヲ求メタル日ヨリ、三十日間ノ經過ニ由テ消滅スルコト、又此ノ事由ヲ

以テ解約シタルトキハ其ノ解約後一箇年間ハ前契約者タル工業製造人ノ承諾ヲ得スシテ同一ノ營業ニ使用セラルヽコトヲ得サルコト

一徒弟又ハ徒弟ノ父母、後見人ヲ勸誘シテ退業セシメタル者、及他ノ徒弟タルコトヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ徒弟ト連帶ニテ損害賠償ノ義務アルコト

第四章　工場製造所

一工場製造所ニ於テハ年齡十歲未滿ノ兒童ヲ職工トシテ使用スルコトヲ得サルコト、但シ徒弟ハ此ノ限リニ在サルコト

一年齡十四歲未滿ノ者ハ一日六時間、十七歲未滿ノ者ハ一日十時間以上使役スルコトヲ得サルコト

一幼年職工ニハ毎日喫食時間ノ外二回以上一定ノ休憩時間ヲ與フヘキコト

一婦女及十四歲未滿ノ職工ヲ夜間使用スルコトヲ得サルコト

一工場製造所職工ノ賃金ハ日給トスルコト、日給金ハ前渡又ハ後拂ヲ爲シ得ヘシト雖、前渡ハ三十日分、後拂ハ十日分ノ賃金額ヲ越エシメサルコト

一工場製造所ノ便宜ノ爲メ、職工ノ住居及其ノ日用品買取場ヲ指定スルコトヲ得ス、職工ノ便宜ノ爲ニスル場合ニハ其ノ管理規則ヲ定メ、地方長官ヲ經テ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘキコト

一農商務大臣ハ職工ノ使用方法カ健康又ハ品行其ノ他經濟ノ發達ヲ害ストル認ムルトキハ特別ノ制限ヲ加ヘ又ハ職工ノ使用ヲ禁シ得ルコト

職工徒弟條例案規定事項ノ要領

第一章　總則

一傭主、職工及徒弟ノ定義

一八歲未滿ノ者ハ職工徒弟トシテ使役スルコトヲ得サルコト

第二章　職工

一傭役契約ハ書面又ハ口上ヲ以テスルコト、口約ノトキハ立合證人アルヲ要スルコト

一傭役書ニハ傭主、職工及職工カ未丁年者ナルトキハ其ノ監督權ヲ有スル者ノ族籍住所氏名年齡、傭役ノ職業、期限、賃錢及其ノ仕拂方法、解約豫告ノ日限、職工カ疾病ニ罹リタルトキノ約定等ヲ記スヘキコト

一解約豫告日限ノ約定ナキトキハ三十日前タルヘキコト

一傭主又ハ職工ノ一方ヨリ他方ニ對シ解約ヲ求メ得ル事由ノ規定

一解約ニ當リ職工ノ結約竝解約ノ年月日使役ノ職業ヲ記載シタル證明書ヲ與フルコト

一職工カ傭主ノ職業上ノ秘訣ヲ漏洩シタル場合、其ノ他不法ノ退職、及他人ノ雇傭中ノ職工ノ誘拐ニ對スル賠償ノ規定

第三章　徒弟

一徒弟修業約定ハ一期十年ヲ超ユルコトヲ得サルコト

一二十八歳ニ滿サル者、又ハ破廉恥罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑期滿限後五年間徒弟ヲ養フコトヲ得サルコト

一修業約定書ニ記載スヘキ事項ノ規定

一十六歳未滿ノ徒弟ニハ授業者ヲシテ讀書、習字及算術ヲ授ケシムルコト

一解約ノ豫告ハ三ヶ月前トスルコト、授業者又ハ徒弟ノ一方ノ申出ニ依リテ解約シ得ル事由ノ規定

一徒弟解約後二年間ハ前工藝者ノ承諾ヲ得スシテ同職業ニ從事シ得サルコト、又他人情ヲ知テ其ノ徒弟ヲ傭入ルヽコトヲ得サルコト

前記二法案中、前者ハ職工及工場ニ關スル一般規定ニシテ、後者ハ職工及徒弟ヲ主トシテ規定シ、試ミニ二樣ニ立案シタルモノナリ。此等兩種ノ法案ハ遂ニ發表スルニ至ラサリシモ、以テ當時ノ立案者ノ意志ノ那邊ニ在リシヤヲ窺フニ足ルヘシ。而シテ職工徒弟條例案ハ參事官會議ニ於テ修正ノ後、關係各局ニ合議シタルニ、此ノ法案タル民業ノ消長、慣習ノ存廢ニ關スルコト大ナルヲ以テ各局ノ意見一致セス、遂ニ廢案ニ歸シタルモノノ如シ。

明治二十二年ニ至リ、工業上ニ使用スル汽罐取締法制定參考ノ爲メ、各府縣ニ於ケル汽罐ノ總數、種類、其ノ他之ニ關スル事項ヲ調査シ、二十三年工務局ヲ廢シテ商工局ヲ設置シ、翌二十四年工場及製造業ニ於ケル傭主被傭者相互ノ權利義務ヲ保護シ、及其ノ業務ノ發達永續ヲ企圖スルノ目的ニ依リ、同年七月職工條例制定ノ要否竝其ノ規定ヲ要スル事項ニ付各商業會議所ニ諮問シタルニ、翌二十五年各其ノ答申書ヲ提出セリ。超エテ二十六年及二十七年ニ於テハ製造場及工場内ニ於ケ

ル勞働者ノ實況調査表樣式ヲ印刷シテ、之ヲ各府縣ニ配附調査セシメ、又各府縣ニ於ケル各種工場取締規則ヲ蒐集シ、尙從來發生シタル汽罐ノ破裂損傷ノ報告ヲ徵スル等各般ノ調査ヲ爲シタリ。要スルニ二十二年以後數年間ハ專ラ調査ヲ行ヒ、一面屢法案ヲ編纂シタルモ改案相踵キテ之ヲ公表スルノ時機ニ達セサリシナリ。

明治二十九年地方長官ヲ招集シテ、職工ノ保護及取締ニ關スル事項ヲ諮問シタルニ、其ノ後ニ至リ答申書ヲ提出シタル一府十九縣中、法令ノ制定ヲ希望シタルモノ一府十四縣ニシテ、爾餘ノ五縣ハ概ネ其ノ制定ヲ否認セリ。又同年第一回農商工高等會議ヲ開キ、職工ノ保護及取締ニ關スル件ヲ諮問シタル結果、同會ハ特別委員ヲ選ヒ之ヲ調査スルコトトナレリ。

明治三十年六月再ヒ工務局ヲ設ケ、志村源太郎氏局長トナリ工場及汽罐ノ構造職工ノ保護取締ニ關スル法令ヲ規定スルノ目的ヲ以テ親シク各地方ノ工場ヲ視察シテ法案ヲ起草セリ。而シテ該案ハ當初工場法案ト爲セシモ之ヲ職工法案ト改メ、法律適用ノ範圍ヲ五十人以上ヲ使用スル工場トセシヲ三十人以上トシ、又原動力ヲ使用スル工場ニ限リタルヲ一般ノ工場ニ適用スルコトト爲シタル等、種々ノ改訂ヲ加エ漸ク之レカ完成ヲ見ルニ至レリ。該案ノ趣旨ハ最初ヨリ精密ノ法令ヲ布クトキハ、工業界ニ激變ヲ來スノ虞アルヲ以テ成ルヘク法文ヲ簡略ニシテ緊切事項ノミヲ規定シ、工場內危險豫防ノ如キ職工保險問題ノ如キハ或ハ之ヲ他日ニ讓リ或ハ之ヲ細則トシテ勅令ヲ以テ規定スル方針ヲ採レリ、從テ該案ハ總則、職工、徒弟、監督及罰則ノ五章ニ別チ、之ヲ三十五條ニ細別セリ。此ノ法案ハ三十二年農商工高等會議ニ諮詢シタル法案ノ前身ニシテ、重ナル相違ノ點ハ諮問案ニ於テハ法ノ適用範圍ハ五十人以上ノ職工徒弟ヲ使役スル工場ト爲セルモ、本案ハ三十人ナルコト、又諮問案ハ其ノ名稱ヲ工場法案トシ更ニ一章ヲ加ヘテ工場ノ建築改築、增築、危害豫防、寄宿舍、社宅、其ノ他ノ工場附屬建物ノ取締ニ關シ規定セルモ、本案ニ之ヲ缺ケルコト等ニシテ、職工、徒弟ノ取締ニ關スル規定ハ略ホ同一ナリ。

此ノ法案ハ第十一回帝國議會ニ提出セントシタルモ、議會ハ十二月二十五日ヲ以テ解散セラレタル爲メ廢案ニ歸シタリ、其ノ規定事項ヲ見ルニ當時諸工業勃興シタル爲メ、職工徒弟爭奪ノ弊甚シク官民共ニ之カ矯正ノ緊切ナルコトヲ認メタルモノヽ如ク、又一般ノ規定事項カ理論ニ馳セ、或ハ外國法令ニ倣フコトナク我邦

ノ實狀ニ近ツキタルノ觀アリ、而シテ此ノ外、擬職工條例、工場法案、工場法草案及工場條例等數種ノ草案相踵テ立案セラレタリ。

又同年十月內務省ニ於テ勞働者疾病保險法案ヲ起草シテ之ヲ農商務省ニ廻附セリ、該案ハ勞働者ノ病災救濟ニ關シ作業主及勞働者ノ義務、疾病保險資金ヨリ勞働者ニ給與スヘキ場合、資金ノ管理法及監督等ニ關スル事項ヲ規定シタルモノナリ。

要スルニ第一期ニ於テハ調査ニ調査ヲ重ネ、屢々法案ヲ編纂シタルモ官民ノ之ニ對スル意向、改案ノ事情等當時ノ情勢ニ付詳細ナル記錄ノ徵スヘキモノナク、其ノ徑路ヲ索ムルコト甚タ困難ニシテ隔靴搔痒ノ感尠カラス。

第二節　第二期（自明治三十一年至同四十二年）

明治三十一年四月志村局長職ヲ退キ翌五月有賀長文氏工務局長ニ任セラレ、前年來ノ一般調査ヲ繼續シ同年六月以後更ニ各地ノ工場及職工、徒弟取締ノ狀況ヲ觀察シ、職工法案ヲ修正シテ之ヲ工場法案ト爲シ、總則、工場、職工、徒弟監督及罰則ノ六章トシ、之ヲ四十條ニ細別セリ。

明治三十一年九月工場法案ヲ各商業會議所ニ廻附諮問シタルニ、三府其ノ他ニ於ケル三十二ノ會議所ハ法令ノ制定ヲ可トシ、名古屋其ノ他ノ七會議所ハ之ヲ否トセリ。又同年十月第三回農商工高等會議ニ工場法制定ノ件ヲ諮問シタルニ、同會ニ於テハ種々討議ノ末、大ナル修正ヲ加ヘテ二十五ケ條ノモノト爲セリ、同月末工務局ノ廢止ニ依リ關係事務ハ商工局ニ移レルカ、翌三十二年四月、農商工高等會議ノ修正ニ係カル法案ヲ各地方長官ニ諮問シタルニ、東京府外十五縣ハ答申書ヲ提出シタリ。而シテ二三縣ニ於テハ地方ノ狀況ニ依リ工場法ノ實施ヲ猶豫スルコトヲ希望セシモ、大體ニ於テ其ノ制定ヲ可トシタルヲ以テ、將ニ進ンテ該法案ヲ帝國議會ニ提出セントスル迄ノ運ヒニ立到リタルニ、時恰モ內閣ノ交迭ニ際シ、遂ニ之カ提出ヲ見ルニ至ラス、更ニ工場及職工ニ關スル調査ヲ行ヒ、其ノ結果ニ依リテ適當ノ處理ヲ爲スヘキコトトナレリ。今農商工高等會議ニ諮問シタル法案竝之ニ添附シタル工場法制定理由書ヲ揭クルコト左ノ如シ。

農商工高等會議ニ諮詢ノ法案

第一章　總　則

第一條　此ノ法律ハ五十名以上ノ職工徒弟ヲ使役スル工場ニ適用ス

第二條　前條以外ノ工場ニシテ事業ノ性質危險ナルモノ健康ニ害アルモノ職工徒弟ノ保護取締上必要アルモノ其ノ他ノ特別ノ事由アルモノハ勅令ヲ以テ此ノ法律ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第二章　工　場

第三條　工場ヲ建設、改築、增築セントスル者ハ當該官廳ニ願出テ認可ヲ受クヘシ既設ノ建物ヲ工場ニ使用セントスル者亦同シ

前項ノ工場ヲ他ノ工場ニ使用シ又ハ工業ノ方法ヲ著シク變更セントスルトキハ更ニ認可ヲ受クヘシ

認可ノ手續條件及効力ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條　工場ノ工事完成シタルトキハ當該官廳ノ檢査ヲ受クヘシ

檢査ニ合格セサル工場ニ於テハ事業ヲ營ムコトヲ得ス

第五條　工場ニハ危險豫防、健康保全、風儀維持、竝公益保護ノ爲メ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第六條　前條ノ設備ニ缺點ヲ生シタルトキハ當該官廳ハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一　期間ヲ定メテ相當ノ施設ヲ命スルコト

一　事業ノ全部又ハ一部ノ停止ヲ命スルコト

前項第一號ノ場合ニ於テハ工業主其期間內ニ指定ノ施設ヲ爲サヽルトキハ當該官廳ニ於テ之ヲ執行シ工業主ヲシテ一切ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七條　工場ニ汽罐ヲ裝置セントスル者ハ當該官廳ニ屆出テ檢査ヲ受クヘシ前項ノ檢査若ハ定期又ハ臨時ノ檢査ニ合格セサル汽罐ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第八條　職工社宅、寄宿舍、病室其ノ他工場ノ附屬建物ニハ本章ノ規定竝之ニ關スル罰則ヲ準用ス

第三章　職　工

第九條　十歳未滿ノ幼者ハ工場ニ於テ使役スルコトヲ得ス但シ特別ノ事由アル工業ニ付テハ命令ヲ以テ本條ノ例外ヲ設クルコトヲ得

第十條　十四歳未滿ノ職工ハ一日十時間ヲ超エテ使役スルコトヲ得ス但シ特別ノ事由アルトキハ當該官廳ノ許可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトヲ得

第十一條　職工ニハ少クトモ一箇月二日ノ休暇及一日一時間ノ休憩ヲ與フヘシ三大節ニハ事業ヲ休止スヘシ

特別ノ事由アリテ前二項ニ依リ難キトキハ當該官廳ノ許可ヲ受クヘシ

第十二條　工業主ハ尋常小學校ノ教科ヲ卒ラサル十四歳未滿ノ職工ニ自己ノ費用ヲ以テ相當ノ教育ヲ與フルノ設備ヲ爲スヘシ

前項ノ職工ハ工業主ノ定ムル教則ニ服從スヘシ

第十三條　職工業務上負傷シタル場合ニ於テハ工業主之ヲ療養シ若ハ療養費ヲ支給スヘシ

前項ノ負傷ニ依リ休養ヲ要スルトキハ手當ヲ支給シ不具又ハ癈疾トナリタルトキハ扶助料ヲ支給スヘシ

本條第一項ノ負傷ニ依リ死亡シタルトキハ埋葬料及遺族手當ヲ支給スヘシ危害ノ原因カ自己若ハ他人ノ故意又ハ天災ニ出ルモノ及危害ヲ避クルタメ特ニ設ケタル禁制ニ違背シタルニ出ルモノハ本條ノ限ニ在ラス

第十四條　職工ハ左ノ場合ニ於テ直ニ契約ヲ解除スルコトヲ得

一　工業主業務監督者又ハ其ノ家族カ職工又ハ其ノ家族ニ對シ暴行虐待ヲ加ヘ若ハ猥褻ノ所爲アリタルトキ

一　生命ヲ危ウシ又ハ健康ニ著シキ害ヲ及ホスヘキ業務ヲ工業主又ハ業務監督者ヨリ强ラレタルトキ

第十五條　工業主ハ左ノ場合ニ於テ直ニ契約ヲ解除スルコトヲ得

一　職工カ工業主、業務監督者又ハ其ノ家族ニ對シ暴行又ハ侮辱ヲ加ヘタルトキ

一　職工カ工場又ハ其ノ附屬設備ノ秩序ヲ紊スヘキ行爲ヲ爲シタルトキ

第十六條　工業主ハ職工トノ關係ヲ定ムル爲メ職工規則ヲ設ケ當該官廳ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更セントスルトキ亦同シ

職工ノ社宅、寄宿舍取締ニ關スル規則亦前項ニ依ル

當該官廳ニ於テ必要ト認ムルトキハ職工規則、社宅寄宿舍規則ノ變更ヲ命スルコトヲ得

第十七條　職工規則ハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

一　雇傭契約ニ關スル規程

一　休日、就業時間及休憩時間ニ關スル規定

一　監督組織ニ關スル規程

一　賞與、懲戒ニ關スル規程

一　賃錢ニ關スル規程

一　第十三條ノ給與及扶助ニ關スル規程

一　積立金ニ關スル規程

一　危害ヲ避クル爲メ特ニ設ケタル禁制

一　第十二條ノ教則

職工規則ハ工業主及職工ヲ羈束ス

第十八條　工業主ハ職工ノ異動ヲ明ニスル爲メ職工名簿ヲ備フヘシ

第十九條　職工ノ取締上必要ノ場合ニ於テハ命令ヲ以テ工業及職工ノ種類ヲ定メ其ノ職工證ヲ所持セシムルコトヲ得

前項ノ職工ニシテ職工證ヲ所持セサルモノハ該工業ニ於テ工業主之ヲ雇入ルヽコトヲ得ス

第二十條　農商務大臣ハ同業組合ノ申請ニ基キ必要ト認ムルトキハ該組合員ノ使役スル職工ニ職工證ヲ所持セシムルコトヲ得

前項ノ職工ニシテ職工證ヲ所持セサル者ハ該組合員之ヲ雇入ルヽコトヲ得ス

第二十一條　職工證ハ原籍地又ハ住所地ノ市町村之ヲ交付スヘシ但シ前條ノ場合ニ於テハ同業組合之ヲ交付スヘシ

第二十二條　職工證ハ工業主之ヲ保管シ解雇ノ際之ヲ職工ニ還附スヘシ

第二十三條　職工名簿及職工證ノ方式竝記載事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章　徒弟

第二十四條　工業主徒弟ヲ養成セントスルトキハ豫メ徒弟規則ヲ設ケ當該官廳ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更セントスルトキ亦同シ

第二十五條　徒弟規則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

一　修業契約ニ關スル規程
一　休日、修業時間及休憩時間ニ關スル規程
一　授業ニ關スル規程
一　給與ニ關スル規程
一　疾病、負傷、死亡手當ニ關スル規程
一　賞與、懲戒ニ關スル規程
一　積立金ニ關スル規程
一　第十二條ノ教則

第二十六條　第九條乃至第十二條第十四條第十五條第十六條第二項第三項第十七條第二項第十八條乃至第二十三條竝之ニ關スル罰則ハ徒弟ノ場合ニ之ヲ準用ス

第五章　監督

第二十七條　農商務大臣ハ婦女及十四歳未滿ノ職工徒弟ノ就業ニシテ特ニ危險ナルカ又ハ健康若ハ風儀ニ害アリト認ムルトキハ之ヲ制限又ハ禁止スルコトヲ得

第二十八條　工場監督官吏ハ工場及其ノ附屬建物ヲ臨檢シ職工及徒弟ニ關スル書類ヲ檢査シ竝工業主若ハ其ノ代理人及被用者ニ證明ヲ求ムルコトヲ得工場監督官吏又ハ工場監督官吏タリシ者ハ其ノ職務執行上知リ得タル營業上ノ秘密ヲ守ルノ義務アルモノトス

第二十九條　此ノ法律ニ依ル行政處分ニ不服アル者ハ訴願法ニ依リ訴願スルコトヲ得

第三十條　職工規則、徒弟規則、社宅寄宿舍規則、雇傭契約又ハ修業契約ニ付工業主ト職工又ハ徒弟間ニ起リタル紛議ハ工場監督官吏ノ裁定ヲ受クルコトヲ得

第六章　罰則

第三十一條　第三條第一項第二項第四條第七條第九條乃至第十一條第十六條第一項第二項第十八條第十九條第二項第二十條第二項第二十二條ニ違背シ又ハ第十六條第三項若ハ第二十七條ノ命令ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第三十二條　職工名簿ニ付虚僞ノ所爲アリタル者及第二十八條ノ場合ニ於テ臨檢檢査若ハ說明ヲ拒ミ又ハ虚僞ノ所爲アリタル者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十三條　他ノ工業主ト雇傭又ハ修業契約期間內ノ職工又ハ徒弟タルヲ知リ其ノ工業主ノ承諾ナクシテ之ヲ使役シタル工業主又ハ其ノ媒介ヲ爲シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

職工、徒弟又ハ其ノ親族、法定代理人、保證人ヲ誘導シ其ノ工業主ニ對シ虚僞ノ所爲ヲ以テ契約ヲ解除セシメ其ノ職工又ハ徒弟ヲ使役シタル工業主又ハ其ノ媒介ヲ爲シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

前二項ノ規定ハ五十名以下ノ職工、徒弟ヲ使役スル工場ニモ之ヲ適用ス

第三十四條　虚僞ノ職工證又ハ虚僞ノ所爲ヲ以テ得タル職工證ヲ行使シ又ハ行使セシメタル者ハ二拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條　第二十八條第二項ニ違背シタル者ハ刑法第三百六十條ノ例ニ據リ處斷ス

第三十六條　此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第三十七條　本法ニ定メタル過料ニ付テハ明治三十一年法律第十四號非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第三十八條　工業主ノ代理人、家族、被用者ニシテ此ノ法律中工業主ニ關スル規定ニ違背スル行爲ヲ爲シタルトキハ工業主ハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ本章罰則ノ適用ヲ免ルヽコトヲ得ス

第三十九條　商事會社ニ在テハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役其ノ他ノ法人ニ在テハ理事ニ工業主ニ關スル本章ノ罰則ヲ適用ス

附　則

第四十條　此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

工場法制定ノ理由

現今本邦工業ノ勃興ト共ニ工場各地ニ起リ、從來ノ家内工業ハ漸ク變移シテ工場工業タラントス。此等工場工業ハ其ノ効果ノ顯著ナルト同時ニ其ノ設備完全ヲ缺クトキハ、之ニ由テ往々人命ヲ危ウシ、比隣公衆ニ重大ノ傷害ヲ與フルコトアリ。之ニ對シテ政府ノ監督ヲ要スルコト甚タ多シ。從來各地方廳ニ於テ既ニ此ノ事ニ關スル取締ヲ爲スモノ尠ナカラスト雖、其ノ方法統一ヲ缺キ、其ノ監督ノ設備完全ナル能ハサルモノアリ。然ルニ此事タル工業者竝一般公衆ニ最モ重大ナル利害ヲ及ホシ、深ク其ノ權利ニ關係スルヲ以テ、其ノ監督ノ方法ニ付テハ、之ヲ地方廳ニ一任セス、豫メ法律ヲ以テ其ノ遵準ヲ定ムルヲ必要トス。加旃此等工場ニ於ケル工業主職工間ノ關係ヲ見ルニ、親睦協和恰モ家族師弟タルカ如キ情誼漸ク去リ階級的差等間隙稍々其ノ跡ヲ現サントセリ。是レ實ニ工場工業ニ伴フ所ノ必然ノ結果ニシテ、之ヲ各國ノ歴史ニ徵スルニ皆然ラサルハナシ。今ヤ情誼ノ關係既ニ衰退シテ之ニ代ハルヘキ法律上ノ關係確立セサルヲ以テ、雇者被雇者ノ規律頗ル紊亂シ、雇者ハ被雇者ノ轉々移動スルニ苦ミ、被雇者ハ亦往々ニシテ雇者ノ壓抑ニ屈從スルノ悲境ニ沈淪スル者アリ、誘拐爭奪ノ弊既ニ起リ、教唆强要ノ風漸ク行ハレントス。此時ニ當リ之ヲ一般ノ趨勢ニ鑑ミ、之ヲ本邦ノ實情ニ照シ、大體ノ法規ヲ設ケテ二者ノ關係ヲ律シ、一面以テ工業者ノ爲ニ其ノ事業經營ノ確實整正ヲ圖リ、一面以テ勞力ノ强健風儀ノ保持ヲ企ツルモノ、是レ我工業ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ケシムルニ最モ必要ノ事業トス、是レ本法ノ制定ヲ要スル所以ナリ。然レ共本問題ノ關係スル所極メテ廣且大ニシテ、殊ニ工業者及勞働者ノ利害ニ直接大關係ヲ及ホスヲ以テ、例令外國ノ事歴ニ徵シ自然ノ趨勢ノ能ク前知シ得ヘキモノアルモ、猶ホ法令ヲ以テ一朝急激ノ變化ヲ加フルハ國家經濟上大ニ考慮スヘキ所ナルヲ以テ、本法ハ暫ク大體ヲ規定シ、單ニ大綱ヲ示シテ弊害ノ最モ甚シキモノヲ豫防スルニ止メ、而シテ工場監督官吏ヲシテ本法ノ實施ヲ監視セシムル傍ラ、常時工場ノ狀態ヲ調査セシメ、其ノ結果ニ基キテ詳ニ利害得失ヲ衡量シ、將來工場工業ノ進歩ニ應シテ能ク其ノ規律ヲ正シ、雇者被雇者ノ調和ヲ計ランコトヲ期ス。因テ其ノ法案ヲ添ヘテ之ヲ諮問ス。

前記工場法案ノ諮問ニ對スル各地商業會議所答申ノ要領ヲ摘記センニ、法律制定ニ對スル可否竝法案ノ大體ニ對スル意見トシテ名古屋、濱松、桑名、大垣、長崎、熊本、博多、栃木等ノ商業會議所ハ尙早ヲ唱ヘ、長野其ノ他ニ於ケル製糸業者ノ團體モ亦尙早トシ、或ハ工場法ハ一般ノ工場ニ適用スヘキモノニアラス、其ノ必要ナルモノヲ先ニシ適用セラルヘキ工場ノ種類ヲ限定スヘシトシ、或ハ工場法ハ工場ノ設備及其ノ取締ニ止メ、職工徒弟ニ關スル規定ヲ設クル必要ナシトスル者アリ。又法案ノ各條ニ對スル意見中最モ議論多キ點ハ、法ノ適用範圍及就業時間ニ關スル規定ニシテ、適用範圍ノ五十人以上ノ職工トアルヲ三十人トスルコトヲ希望スルモノアリ、或ハ百人ヲ適當ナリト云フモノアリ、或ハ蒸汽力其ノ他ノ原動力ヲ用フルモノニ適用セラレタシトセリ。次ニ職工ノ年齢ニ關シテハ十歲未滿ノ幼者ノ使役ヲ絕對ニ禁止セラレタシトシ、或ハ之ニ反シ十歲未滿ノ者ノ使用範圍ヲ廣メラレタシトセリ、又就業時間ノ制限ニ對シテハ、或ハ十四歲未滿ハ之ヲ女子ニ限リ男子ハ十六歲未滿ト更メラレタシトシ、又就業時間ノ十時間ヲ十二時間トシ、或ハ十四時間トスルコトヲ望ミ、或ハ時間制限ノ規定ヲ削除スヘシト論スルモノアリ。

次ニ十四歲未滿ノ職工ニ教育ヲ施スヘキ規定ニ對シテ此規定ノ全部ヲ削除スヘシトシ、或ハ寄宿舍內ノ職工ニ限ルコトニ修正希望ノモノアリ、其ノ他各條ニ對シ多少ノ修正意見アリテ區々歸一スル所ナシ。

又農商工高等會議ハ委員會ニ於テ數回審議ノ末左ノ修正案ヲ提出シ、其ノ希望トシテ工場及勞働ニ關スル事實ノ調査ハ最モ重要ノ事項ニ屬スルヲ以テ、政府ハ之カ爲メニ相當ノ費用ヲ支出シ、該事實ヲ調査セシムル爲メ適當ノ方法ヲ設ケラレタシト附記セリ。又委員會ノ少數意見トシテ本修正案ハ職工保護ニ止マリ、一般勞働者ニ其ノ効力ヲ及サヽル缺點アリ、職工及勞働者ノ有樣ニ付テハ未タ充分ノ調査ヲ得ス、今日ニ於テ其ノ利弊ヲ究メ難シ、故ニ不充分ナル調査ヲ以テ法律ヲ制定スルコトヲ避クル爲メ、本案ノ職工徒弟ニ關スル規定ハ之ヲ削除シ、單ニ工場ノ危害豫防ノ部分ニ止メラレタシ、職工爭奪ノ弊ノ如キハ勞働需要ノ急激ナル增加ニ歸因セルモノナレハ、法律ヲ以テ之ヲ防制スルノ要ナシトセシカ、本會議ニ於テハ討論審議ノ末左記ノ如キ委員會ノ修正案ヲ通過セリ。

農商工高等會議ノ修正案

第一章　工場

第一條　工場ヲ建設、改築、增築セントスル者ハ地方長官ニ届出ヘシ既設ノ建物ヲ工場ニ使用セントスル者亦同シ

前項ノ工場ヲ他ノ工業ニ使用シ又ハ工業ノ方法ヲ變更セントスルトキハ更ニ届出ヘシ

第二條　前條ノ届出アリタルトキハ地方長官ハ其ノ工事ヲ檢査スヘシ檢査ニ合格セサル工場ニ於テハ事業ヲ營ムコトヲ得ス

第三條　工場ニハ危險ノ豫防、健康ノ保全風儀ノ維持竝公益保護ノ爲必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第四條　前條ノ設備ニ缺點アリタルトキハ地方長官ハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一　期間ヲ定メテ相當ノ施設ヲ命スルコト

一　事業ノ全部又ハ一部ノ停止ヲ命スルコト

前項第一號ノ場合ニ於テ工業主其ノ期間内ニ指定ノ施設ヲ爲サヽルトキハ地方長官ニ於テ之ヲ執行シ工業主ヲシテ一切ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第五條　前各條ノ規定ハ左ノ工場ニ限リ之ヲ適用ス

一　蒸氣力、水力、電氣力、瓦斯力又ハ其ノ他ノ原動力ヲ用フルモノ

一　前號以外ノ工場ニシテ事業ノ性質危險ナルモノ衛生其ノ他公益ニ害アルモノ但シ此ノ場合ニ於テハ豫メ勅令ヲ以テ其ノ工場ノ種類ヲ指定スルヲ要ス

第六條　工場ニ附屬スル寄宿舍及病室ニハ工場ニ關スル前各條ノ規定竝ニ關スル罰則ヲ準用ス

第七條　工場ニ汽罐ヲ裝置セントスル者ハ地方長官ニ届出テ檢査ヲ受クヘシ

前項ノ檢査若ハ定期又ハ臨時ノ檢査ニ合格セサル汽罐ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第八條　工場、寄宿舍及病室ノ設備竝汽罐檢査ニ關スル規則ハ地方長官之ヲ

定メ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二章　職工徒弟

第九條　農商務大臣ハ左ノ各號ノ範圍内ニ於テ省令ヲ以テ工場ノ職工徒弟ノ使役ニ關スル規則ヲ定ムルコトヲ得

一　十歳未滿ノ幼者ノ使役ヲ禁制若ハ制限スルコト

一　女子又ハ十四歳未滿ノ職工徒弟ニ一日十二時間以上ノ就業時間及就業ノ種類ヲ制限スルコト

一　職工徒弟ニ一箇月二日ノ休暇及一日十時間以上ノ勞働ヲ爲ス場合ハ一時間ノ休憩ヲ與ヘシムルコト

第十條　工業主ハ工場寄宿舍ニ居住スル職工徒弟ニシテ十四歳未滿ノ者ニ對シ相當ノ教育ヲ與ヘ且其ノ疾病ノ際引取人ナキトキハ之ヲ救養スルノ義務アルモノトス

第十一條　職工作業上負傷若ハ死亡シタル場合ニハ工業主ハ少クモ左ニ掲クル各號ノ救恤ヲ爲スノ義務アルモノトス但シ危害ノ原因自己若ハ他人ノ故意又ハ天災ニ出ルモノ及危害ヲ避クル爲特ニ設ケタル禁則ニ違背シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

一　職工カ負傷シタルトキハ負傷ノ當時ニ得タル賃錢ノ半額ヲ休養中支給スルコト

一　前號ノ場合ニ於テハ療養ノ實費ヲ給シ若ハ自ラ療養ヲ與フルコト

一　負傷ニ因リ勞作ヲ爲スコト能ハサルニ至リタルトキハ職工カ負傷ノ當時ニ得タル賃錢二箇年分

一　負傷ニ因リ勞作ヲ減シタル場合ニハ其ノ減少ノ程度ニ應シテ減シタル金額

一　負傷ニ因リ死亡シタル場合ニ於テハ負傷ノ當時ニ得タル賃錢ノ三十日分

一　前號ノ死亡者ノ扶養ニ依リテ生活シタル遺族アルトキハ前號賃錢ノ一箇年分

前項第三號及第四號ノ金額ハ三百五十圓第六號ノ金額ハ百五十圓ヲ以テ

最高額トス

前二項ノ規定ハ徒弟ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十二條　工業主ハ職工、徒弟規則ヲ設ケ地方長官ニ届出ヘシ之ヲ變更スルトキ亦同シ

寄宿舍取締ニ關スル規則亦前項ニ依ル

第十三條　職工、徒弟規則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

一　雇傭契約又ハ修業契約ニ關スル規程

一　休日、就業時間及休憩時間ニ關スル規程

一　賞罰ニ關スル規程

一　賃錢若ハ手當ニ關スル規程

一　救恤ニ關スル規程

一　積立金ヲ爲ス場合ニハ其ノ規程

一　危害ヲ避クル爲メ特ニ設ケタル禁制アルトキハ其ノ禁制

一　職工、徒弟規則ハ工業主及職工、徒弟ヲ羈束ス

第三章　監　督

第十四條　農商務大臣ハ工場視察官ヲシテ工場ニ臨檢セシムルコトヲ得

第十五條　此ノ法律ニ依ル行政處分ニ不服アルモノハ行政訴訟ヲ提起シ又ハ訴願法ニ依リ訴願スルコトヲ得

第四章　罰　則

第十六條　第一條、第七條第一項及第十二條ノ届出ヲ怠リタル者ハ二十圓以下ノ過料ニ處ス

第十七條　第二條第二項及第七條第二項ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第十八條　工業主ト契約中ノ職工、徒弟又ハ其ノ親族、法定代理人、保證人ヲ誘導シ他ノ工業主ヲシテ其ノ職工又ハ徒弟ヲ使役セシメタル媒介者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條　此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

第二十條　本法ニ定メタル過料ニ付キテハ明治三十一年法律第十四條非訟

事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第二十一條　工業主ノ代理人家族、被傭者ニシテ此ノ法律中工業主ニ關スル規定ニ違背スル行爲ヲ爲シタルトキハ工業主ハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ本章罰則ノ適用ヲ免カルルコトヲ得ス

附　則

第二十二條　此ノ法律ハ明治三十三年一月一日ヨリ施行ス

明治三十二年八月、關西府縣勸業會ノ決議ニ依リ京都大阪兵庫等ノ二府十五縣知事總代ヨリ近來工業ノ發達ト共ニ職工爭奪ノ弊風ヲ生シ、工業主ヲシテ意外ノ損害ヲ被ラシメ、工業ノ發達ヲ阻碍スルモノ尠カラス、到底府縣令ヲ以テ其ノ効ヲ奏シ得サルニ依リ工業條例ヲ設ケラレタシト建議セリ。

前記ノ如ク農商工高等會議ニ諮問ノ法案ハ議會ニ提出スルニ至ラス、更ニ工場及職工ニ關スル事實ヲ調査シテ本件ヲ處理スルコトニ決シ、明治三十三年度ヨリ臨時工場調査費約一萬圓ヲ豫算ニ編入シ、其ノ成立スルニ及ンテ同年四月勅令第百四十九號ヲ以テ臨時工場調査職員ヲ設ケ、商工局工務課ニ工場調査掛ヲ置キ、商工局長木内重四郎氏ノ下ニ、内務省參事官兼農商務書記官窪田静太郎氏其ノ主任トナリ、法制、經濟、建築、衛生、機械、化學等ノ各學科ヲ專攻シタル職員ヲ增加シテ、本件ニ關スル既往ノ事蹟、外國ニ於ケル事實及制度ヲ調査シ、掛員各自專門事項ニ應シテ工場ヲ視察シ、又工業會社員、技師、職工等ト會談シテ精細ノ調査ヲ遂ケテ、工場及職工ノ現狀ト其ノ弊害ヲ確カメ、法案ヲ起草シ、三十五年十一月、該法令案ノ要領ヲ關係各省、地方長官及商業會議所ニ廻付シ、其ノ意見ヲ徵シタリ。答申ノ内或ハ同法ノ制定ヲ尚早ナリトスルモノナキニ非ラサリシモ、多數ハ根本的異見ヲ有セサルコトヲ確メタルヲ以テ、諮問案ニ修正ヲ加ヘタル後、法律案トシテ之ヲ議會ニ提出センコトヲ期シタリ。然ルニ、日露ノ時局ハ一般經濟界ノ緊縮トナリ、越エテ三十七、八年ノ事變アリ、戰後ニ於ケル經濟界ノ變動ハ本案提出ノ時機ヲ失ハシメタルヲ以テ、工場調査職員ハ明治三十六年ヲ以テ廢止ニ歸シタルニ拘ハラス、依然調査ヲ繼續シタリ。此ノ間議會ニ於テハ明治三十三年及明治三十五年ヲ以テ工場法ヲ速カニ制定スヘキ旨ヲ建議シ、踵テ三十六年及四十三年ニ於テ政府ノ工場法ヲ提出セサル理由ヲ質問シタリ。

明治三十六年七月清浦子爵農商務大臣トナリ、同年九月森田茂吉氏商工局長トナリ、參事官岡實、窪田書記官ニ代リテ工務課長トナリ、本件處理ノ任ニ當レリ。前記ノ如ク臨時工場調査職員ハ同年九月ニ至リ廢止セラレタル結果從來工場調査費タリシ約一萬圓ノ經費ハ豫算中ヨリ刪除セラレ、之カ爲ニ職員ノ減少其ノ他本件ノ進行ニ不便ヲ來シタルモ、通常經費ノ範圍内ニ於テ其ノ事務ヲ繼續シ、關係職員ヲシテ工場及職工ノ調査ヲ爲サシメ、臨時工場調査職員ノ事蹟ノ一タル工場調査要領ヲ修正シテ、其ノ第二版ヲ作リ、又三十五年發表ノ法案要領ニ對スル公私ノ意見ヲ參酌シテ、編纂シタル工場法案ニ付反覆審議ヲ竭シテ、日露事變ノ終局後ニ於ケル一般經濟界ノ恢復ノ時機ヲ待テリ。其ノ間ニ於テ三十九年松岡康毅氏清浦子爵ノ後ヲ襲ヒ尋テ四十一年七月大浦子爵代リテ農商務大臣トナリ、四十二年七月商工局ヲ商務及工務ノ二局ニ分チ、鹿子木小五郎氏ヲ工務局長ニ任シテ愈第二十六議會ニ法案ヲ提出スルコトトナレリ。

猶明治三十五六年以後ニ於テモ工場及職工ノ狀態ハ依然トシテ革マラサルノミナラス、其ノ弊害ノ矯正ヲ要スルモノ益多キヲ加ヘ來タリシヲ以テ、當業者中ニ於テモ心アルモノハ我工業ノ前途ヲ慮リテ私カニ其ノ制定ヲ望ムニ至レリ。

明治四十二年十月工場法案ノ說明ト題スル冊子ヲ編纂シテ、工場法制定ノ由來、工場法規定事項ノ大體ノ說明及工場法案各條ノ說明等ヲ記シ、之ヲ關係各省、各地方長官、商業會議所、大日本蠶糸會、大日本紡績聯合會、日本工業協會、其ノ他ノ團體ニ廻附シテ其ノ意見ヲ徵シ、其ノ他新聞及雜誌ニ依リテ一般ニ公表シタルノミナラス、東京府廳及東京商業會議所等及大阪、京都、愛知、靜岡等ノ工業地ニ出張シテ、親シク當業者ト會談シ、法律制定ノ趣旨ト規定事項ノ意義ヲ明カニスルコトヲ努メタリ。此等諮問ニ對スル答申ノ内容ハ玆ニ之ヲ詳述スルノ遑ナシト雖、大體ニ於テ工場法ノ制定ヲ否トスルモノハ甚タ稀ニシテ、或ハ適用ノ範圍ニ付、或ハ職工ノ年齡、就業時間ノ制限等ニ付種々ノ意見ヲ開陳シ、又法案カ其ノ詳細ナル規定ヲ命令ニ讓レル點ニ對シ非難尠カラサリシト雖、法案ノ制定ニ關シ絕對的反對ノ意見ハ殆ト皆無ナリシト、各條ニ對スル修正意見ノ較ヤ眞摯トナレルモノアルカ如キハ、時勢ノ進歩ニ依リテ法令制定ノ必要ヲ自覺シタルモノ多キヲ加ヘタルニ職由ス。

法案ノ諮問ニ對スル答申中最モ重要ナル結果ヲ生シタルモノハ、中央衞生會ノ

意見ナリトス。同會ニ於ケル重ナル修正ハ法律施行後五年ヲ期シテ、十六歳未滿ノ者及女子ノ夜間就業ヲ禁スル規定ヲ設クルコト之ナリ。幼少者及女子ノ夜間勞働ノ禁止ハ立案者ノ理想ナリシモ、何等勞働ニ關スル法令ナキ今日ニ於テハ、急激ナル變動ヲ避クル爲メ、暫ク忍フコト妥當ナルヘシト信シタルナリ。然ルニ工場衛生ノ改善ヲ主タル目的トスル法律ニ於テ、今日工場ノ弊害中最モ大ナル夜業ヲ禁止セサルハ不當ナリトノ修正意見ニ對シテハ、之ヲ反駁スヘキ理由薄弱ナルノミナラス、內務省ハ中央衛生會ノ決議ヲ重シテ此ノ意見ヲ採擇スルコトヲ希望シタルヲ以テ、審議ノ末夜業禁止規定ノ施行ヲ十年後トスルコトニ決シ、尙關係各省、地方長官、商業會議所等ノ答申ニ依リテ其ノ他ノ修正ヲ加ヘ、農商務大臣、內務大臣ノ合議ヲ經テ閣議決定シ第二十六議會ニ提出シタリ。

議會ハ本件ヲ十九名ノ委員ニ附托シ調査セシメタリ。然ルニ提出案ノ發表セラルルヤ夜業禁止ニ對スル非難ノ聲高ク、就中綿糸紡績業者ハ激烈ナル反對ニ出テ、法律全體ノ否決トモナルヘキ形勢ト爲リタルヲ以テ、政府ハ仍調査修正ノ必要ヲ認メ、遂ニ之ヲ撤回スルニ至レリ、是レ實ニ明治四十三年二月ノ事ナリトス。

左ニ明治三十五年公表シタル工場法案ノ要領竝之ニ對スル世論ノ大勢ヲ示スヘキ意見ノ概要及第二十六議會ニ提出シタル法案ヲ掲ク。

明治三十五年公表シタル工場法案要領

第一　法令適用ノ範圍

(甲)　工場法ヲ適用スル工場ハ常時三十人以上ノ職工、徒弟ヲ傭使スルモノトス但シ官立及公立ノ工場ヲモ包含スルコト

(乙)　臨時開設スル工場及平時前項ノ員數未滿ノ職工徒弟ヲ傭使スル工場ニ於テ臨時其以上ノ職工、徒弟ヲ傭使スル場合ニ關シテハ特別ノ規定ヲ設クルコト

(丙)　甲號ニ掲クル以外ノ工場ニモ必要アルトキ、勅令ヲ以テ工場法ノ全部又ハ一部ヲ準用スルコト

第二　工場ノ取締

(甲)　新ニ工場ヲ設置セントスルトキ及其ノ改築增築等ヲ爲サントスルトキハ行政廳ニ屆出テ認可ヲ受ケシメ且行政廳ノ檢査ニ合格シタル後

使用セシムルコト

(乙) 工場ニハ危險ヲ豫防シ健康ヲ保全シ風紀ヲ維持シ及公益ヲ害セサル爲必要ナル方法設備ヲ爲スヘキコト

(丙) 寄宿舍其ノ他工場ノ附屬建設物及設備ノ取締ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ定ムルコト

第三　汽罐ノ取締

(甲) 工場ニ汽罐ヲ裝置セムトスルトキハ行政廳ニ屆出テ認可ヲ受ケシムルコト

(乙) 汽罐ハ行政廳ノ檢査ニ合格シ檢査證書ヲ得タルモノニ非ラサレハ使用セシメサルコト

第四　職工、徒弟ノ年齡ノ制限

十一歲未滿ノ者ハ工場ニ於テ傭使セシメサルコト但シ勅令ヲ以テ向十箇年間左ノ如キ猶豫ヲ與フルコト

滿八歲以上ノ者ハ工場法施行後二箇年ヲ限リ、滿九歲以上ノ者ハ次ノ三箇年ヲ限リ、滿十歲以上ノ者ハ次ノ五箇年ヲ限リ傭使セラルヽヲ得ルコト但シ一タヒ傭使セラレ得ル年齡ニ達シタル者ハ爾後本文ニ抵觸スルニ至ルモ仍傭使ヲ妨ケサルモノトス

第五　晝夜業ノ制限

十六歲未滿ノ男女又ハ滿十六歲以上ノ女子ハ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間工場ニ於テ傭使セシメサルコト但シ左ノ例外ヲ設クルコト

(一) 天災事變ニ際シテハ勅令ヲ以テ一時此ノ制限ヲ撤去スルヲ得ルコト

(二) 勅令ヲ以テ特種ノ事業及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關スル除外例ヲ規定スルコト

(三) 工場ニ於テ職工、徒弟ヲ二組以上ニ分チ交替ニ傭使スル場合ニ關シテハ勅令ヲ以テ左ノ如キ除外例ヲ規定スルコト

滿十三歲以上十六歲未滿ノ男女及滿十六歲以上ノ女子ハ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ト雖トモ工場ニ於テ傭使スルヲ得ルコト但シ工場法施行後五箇年間ハ滿十一歲以上十三歲未滿ノ男女ヲモ傭使スル

ヲ得ルコト

(四) 前二號ノ場合ニ就テハ職工、徒弟各組交替ノ時期、就業時間、休憩時間及休日ニ關スル特別ノ規定ニ從フヲ要スルコト

第六　就業時間ノ制限

十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニハ勅令ヲ以テ十二時間以上ノ就業時間ヲ制限スルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ハ向十箇年ヲ期シ漸次就業時間ヲ短縮スルノ目的ヲ以テ左ノ如ク定ムルコト但シ天災事變ノ際及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關シテハ例外ヲ設クルコト

(甲) 十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ハ左ニ掲クル就業時間ヲ超エ傭使スルヲ得サルコト

第一種工場　十四時間

第二種工場　十五時間

(乙) 工場法施行ノ日ヨリ五箇年ノ後ハ第一種工場ノ就業時間ヲ十三時間ニ短縮シ第二種工場ノ就業時間ヲ十四時間ニ短縮シテ五箇年ヲ經タル後ハ第一種工場ノ就業時間ヲ十二時間ニ短縮シ第二種工場ノ就業時間ヲ十三時間ニ短縮スルコト

(丙) 工場ノ種別ハ別ニ之ヲ定ムルコト

就業時間ノ制限ニ對スル例外ハ左ノ如シ

(一) 臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於テハ一周年間或日數(九十日)ヲ限リ行政廳ニ屆出テテ制限時間ヲ超ユルコト二時間以内ハ就業時間ヲ延長スルヲ得ルコト

(二) 天災ニ際シテ地方長官ハ農商務大臣ノ指揮ヲ請ヒ地域及期間ヲ限リテ就業時間ノ制限ヲ停止スルヲ得ルコト

(三) 事變ニ際シ陸海軍省所管ノ工場又ハ事件ニ關シ必要ナル事業ヲ營ム官私立ノ工場ニ於テ就業時間ノ制限ニ據リ難キトキハ主務大臣ノ指揮ヲ請ヒ制限以上就業時間ヲ延長スルヲ得ルコト

第七　休憩時間ノコト

十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ關シテハ勅令ヲ以テ一日一

時三十分間以内ノ食事及休憩時間ニ關スル規則ヲ定ムルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ハ左ノ如ク定ムルコト

工場ニ於テハ一日一時三十分間以上ノ食事及休憩時間ヲ定メ十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ休憩ヲ爲サシムヘキコト但シ一日ノ就業時間カ十二時間以内ナル場合ニ於テハ休憩時間ヲ一時間ト爲シ一日ノ就業時間カ十時間以内ナル場合ニ於テハ休憩時間ヲ四十五分間ト爲スヲ得ルコト

事業ノ種類ニ依リ休憩時間中機械ノ運轉ヲ停止スヘキコト但シ事業ノ種類ハ農商務大臣之ヲ指定スルコト

第八　休日ノコト

十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ關シテハ勅令ヲ以テ一箇月二日以内ノ休日ニ關スル規則ヲ定ムルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ニハ就業時間ノ制限ニ對スル例外ニ準シテ天災事變ノ際及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關スル例外ヲ設クルコト

第九　特ニ危險ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ニ關スル制限

十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニハ勅令ヲ以テ特ニ危險ナルカ又ハ健康ニ害アル業務ヲ禁止制限スルヲ得ルコトトス但シ其ノ勅令ヲ以テ制限スルモノハ左ノ如シ

(甲)　運轉中ノ機械ノ危險ナル部分、原動力機若ハ動力傳導裝置ノ掃除、注油檢査若ハ修繕又ハ運轉中ノ調帶、調索ノ取外シ若ハ取付ケニ十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ヲ傭使スルヲ得サルコト

(乙)　塵埃、粉末、有害瓦斯ヲ發スル業務、毒藥、劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性ノ料品ヲ取扱フ業務、塵埃、粉末、有害瓦斯ヲ發生スル場所ニ於ケル業務ニハ十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ノ傭使ヲ禁止シ又ハ制限スルコト但シ業務及職工ノ種類ハ農商務大臣之ヲ指定スルコト

第十　業務上ノ死傷ノ扶助

職工徒弟業務上負傷シ又ハ死亡シタル場合ニハ工業主ハ命令ノ定ムル所

ニ依リ扶助ヲ爲スヘキコト但シ扶助ノ程度ハ左ノ如クスルコト

(一) 治療看護ノ費用ヲ負擔スルコト

(二) 療養ノ爲五日以上ノ休養ヲ要スルトキハ少クトモ賃金ノ半額ヲ休業中給與スルコト

(三) 負傷ニ依リ終身勞働ニ從事スルコト能ハス又ハ終身勞働ノ能力ヲ減スヘキ不具癈疾ト爲リタルトキハ賃金ノ二箇年分以内ヲ給與スルコト但シ二百五十圓ヲ以テ最高額トスルコト

(四) 負傷ニヨリ死亡シタルトキハ葬式ノ費用ヲ負擔スルコト但シ二十圓ヲ以テ最高額トスルコト

(五) 死亡者ノ遺族アルトキハ賃金ノ一箇年半分ヲ給與スルコト但シ二百圓ヲ以テ最高額トスルコト

第十一　寄宿舍ニ於ケル死傷者ノ扶助

工場附屬ノ寄宿舍ニ寄宿スル職工、徒弟負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ三箇月ヲ超エサル期間ニ於テ適當ナル引取人アルマテ治療及看護ヲ與フヘキコト其ノ死亡シテ引取人ナキトキハ葬式ヲ行フヘキコト

第十二　職工、徒弟ノ雇入紹介ノ取締

右ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ定ムルコト

第十三　工場ノ監督

工場ノ監督ハ地方長官第一次ノ監督ヲ行ヒ農商務大臣第二次ノ監督ヲ行フコト但シ事ノ重大ナルモノハ農商務大臣ノ指揮ヲ請ハシメ又ハ農商務大臣直接ニ監督處分ヲ行フコト

官立工場ノ監督ニ關シテハ特例ヲ設クルコト

第十四　法律施行ノ期限

工場法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ定ムルコト

工場法施行ノ際現ニ存スル工場又ハ汽罐ニ關シテハ別ニ認可ノ手續ヲ要セス法律施行後一箇年内ニ屆出ヲ爲サシムルコト

工場法案要領ニ對スル意見概要

提出意見事項	意見提出者名	關係各官廳府縣知事	道廳長官商業會議所	計
照會發送數		八	五三	一〇八
回答到着數		四七	五一	一〇四
異議ナキモノ（意見ナキモノヲ含有ス）		三	六	二一
修正意見ヲ提出シタルモノ		五	三一	五七
制定ノ時機尚早シトスルモノ			一六	一六
法律ノ制定ヲ不可トスルモノ			二	四
法律ノ制定ヲ不可トスルモノニシテ修正意見ヲ附シタルモノ			五	五
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ			一	一
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ		三	一〇	三六
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ		四	八	二二
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ		二	七	二六
就業時間ノ制限及休憩時間ニ關スルモノ		三	一三	二四
危險ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ		四	一四	三四
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舍ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ		二	一三	二八
其ノ他ニ關スルモノ		一	五	八
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ		一五	一二	二八
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ		一	一	三
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ		一	二	二
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ		一	一	三
就業時間ノ制限及休憩時間ニ關スルモノ		一	一	一
危險ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ		二	一	二
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舍ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ		三	一	二
其ノ他ニ關スルモノ			一	一
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ			一	一
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ			一	一
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ			一	一
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ			一	一
就業時間ノ制限及休憩時間ニ關スルモノ			二	二
危險ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ			二	二
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舍ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ			二	二
其ノ他ニ關スルモノ			一	一
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ			一	一
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ			一	一
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ			一	一
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ			一	一
就業時間ノ制限及休憩時間ニ關スルモノ			一	一
危險ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ			二	二
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舍ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ			二	二
其ノ他ニ關スルモノ			一	一

工場法

第一條　本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノニ之ヲ適用ス

第一章　工場法制定ノ沿革

一　原動力機ヲ裝置スルモノ

二　事業ノ性質危險ナルカ又ハ衞生上有害ノ虞アルモノ

第二條　工場主ハ十二歳未滿ノ者ヲ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合及行政官廳ノ許可ヲ得テ十歳以上ノ者ヲ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ヲ夜間工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ十四歳以上ノ者ニ付左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ之ヲ適用セス本法施行後五年ヲ限リ十二歳以上ノ者ニ付亦同シ

一　一時ニ作業スルニ非サレハ原料ニ變敗ヲ生シ易キ事業ニ就カシムルトキ

二　職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項第二號ノ規定ハ本法施行後十年ニシテ其ノ效力ヲ失フ但シ繼續作業ヲ要スル事業ニシテ女子ヲ夜間工場ニ於テ就業セシメサルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二項第一號及前項ノ事業ノ種類竝第二項第二號ノ場合ニ於ケル就業時間、休憩時間、交替及休暇ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條　前條ニ於テ夜間ト稱スルハ四月一日ヨリ九月三十日迄ハ午後九時ヨリ午前四時迄トシ十月一日ヨリ三月三十一日迄ハ午後十時ヨリ午前五時迄トス

第五條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ヲシテ一日十二時間ヲ超エ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ事業ノ種類ニ依リ前項ノ就業時間ヲ二時間以內延長スルコトヲ得

第六條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二日ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ四十五分間、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ク可シ

第七條　天災事變又ハ事變ノ虞アル爲必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ第三條、第五條又ハ第六條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於テハ工業主ハ期間ヲ定メ行政官廳ノ許可ヲ得テ第五條ノ就業時間ヲ延長シ又ハ第六條ノ休暇ヲ廢スルコトヲ得但シ其ノ期間ニシテ毎月五日ヲ超エサルトキハ豫メ行政官廳ニ屆出テ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

第八條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、檢査若ハ修繕ヲ爲シ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ヲ取付ケ其ノ他命令ヲ以テ指定スル危險ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第九條　工業主ハ十六歳未滿ノ者ヲシテ毒藥、劇藥、有害料品又ハ爆發性若ハ發火性ノ料品ヲ取扱フ業務竝著シク塵埃、粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發生スル場所ニ於ケル業務其ノ他危險若ハ衞生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

前項ノ業務ハ命令ヲ以テ之ヲ指定ス

主務大臣必要ト認ムルトキハ十六歳以上ノ女子ニ關シテモ第一項ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第十條　主務大臣ハ病者又ハ產婦ノ使用ヲ制限シ又ハ禁示スルコトヲ得

第十一條　行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建物竝設備カ危險ヲ生シ又ハ衞生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

前項ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提出シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第十二條　當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帶ス可シ

第十三條　工業主ハ職工自己ノ重大ナル過失ニ因ラスシテ業務上負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族

ヲ扶助ス可シ

第十四條　職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條　職工若ハ職工タラントスル者又ハ其ノ法定代理人及工業主ハ職工又ハ職工タラムトスル者ノ戸籍ニ關シテ戸籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十六條　第一條ニ該當セサル工場ニ付必要ト認ムルトキハ勅令ヲ以テ本法ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第十七條　第二條、第三條第一項、第五條、第六條、第八條、第九條及第十三條ノ規定又ハ第三條第四項若ハ第十條ノ規定ニ基キテ發スル命令ニ違背シタル者及第十一條第一項ノ規定ニ依ル行政官廳ノ處分ニ從ハサル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條　當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ妨ケタル者及臨檢ノ際當該官吏ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス又ハ虚僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條　工業主ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

但シ工業主及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十條　工業主ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルコトヲ得ス

第二十一條　工業主未成年者若ハ禁治產者ナルトキ又ハ命令ノ定ムル所ニ依リ別ニ工業管理人ヲ置キタルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ工業主ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ其ノ法定代理人又ハ工業管理人ニ適用ス

營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ前項法定代理人ニ關スル規定ヲ適用セス

第二十二條　明治三十三年法律第五十二號ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル

命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

（參　照）

第一條　法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ租税ニ關スル法規ヲ犯シタル場合ニ於テハ各法規ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス但シ其ノ罰則ニ於テ罰金科料以外ノ刑ニ處スヘキコトヲ規定シタルトキハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二條　法人ヲ處罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

第三條　法人ヲ處罰スルノ裁判確定シタル日ヨリ罰金ニ關シテハ一月以内科料ニ關シテハ十日以内ニ之ヲ完納セサルトキハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒテ其ノ執行ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ノ命令ヲ以テ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力アルモノトス

前項ニ依リ執行ヲ爲スニハ執行前裁判ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス

第二十三條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三節　第三期（自明治四十三年至明治四十四年）

第二十六議會ニ提出セラレタル工場法案ハ遂ニ撤回ノ已ムナキニ至レリ。然レトモ今ヤ有識者中工場法ノ制定ニ對シテ異論ヲ挾ムモノハ殆ントナク、又工業主中ニ在リテモ、之ニ對シテ根本的ニ反對ノ意見ヲ有スル者ハ極メテ少數ニシテ、唯法律規程事項ノ適否如何ニ付諸説ノ紛々タルヲ見ルノミ。左レハ法案ノ撤回ハ更ニ一層精密ノ調査ヲ遂ケ、且各方面ノ意見ヲ精査シテ適當ノ修正ヲ加ヘ、次期議會ニ提出スヘキコトヲ意味シタルモノニ外ナラサルナリ。

明治四十三年六月參事官岡實工務局長ニ任セラレ本件ヲ進行スルコトトナリ、

參事官片山義勝、技師野田忠廣同小西正二同樋口眷一、同庄司市太郎氏等ノ職員ト共ニ更ニ工場及職工ノ衞生事項、歸郷女工ノ健康狀態竝婦女幼少者ニ禁止スヘキ業務ノ種類等ニ關スル調査ヲ進メ、前法案中論難ノ一焦點ナリシ命令委任ノ條項ハ出來得ル限リ之ヲ法律中ニ規定センコトヲ試ミタリ、然リ而シテ婦女幼少者ノ徹夜業禁止ノ規定ハ前議會ニ於テ本案ノ成立ニ至ラサリシ最モ重ナル原因ヲ爲スモノナリト雖、此ノ規定ヲ削除スルハ最モ忍ヒ難キ所ナルヲ以テ、依然之ヲ存置スルコトニ決シ、一方ニ於テハ紡績業カ蒙ル可キ經濟上ノ影響如何ヲ精査シ、夜業ノ一部禁止ヨリ遂ニ全禁ニ導ク可キ方法ヲ攻究スルニ殆ント全力ヲ傾注セリ。斯クテ其ノ他ノ箇條ニ付テモ十分ノ審議ヲ重ネタル後、前年提出ノ法案ヲ修正シテ法案全部ニ亘リテ精密ナル說明書ヲ作製シ同年十月前例ニ依リ關係各省、地方長官、商業會議所、社會政策學會、大日本蠶絲會、大日本紡績聯合會、工業協會其ノ他ノ工業團體ニ照會又ハ諮問シテ其ノ意見ヲ求メ、之ト同時ニ中央衞生會ニ諮詢セリ。而シテ此等答申ノ略ホ集マルヲ待ツテ答申案ヲ具シテ、法案ヲ生產調査會ノ議ニ付シタリ。諮問案ノ全文及前期議會提出案ニ對スル修正箇條ノ要點左ノ如シ

明治四十三年十月諮問案

第一條　本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノニ之ヲ適用ス

一　原動力ヲ用ウルモノ

二　事業ノ性質危險ナルカ又ハ衞生上有害ノ虞アルモノ

三　當時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ

第二條　工業主ハ十二歲未滿ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歲以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付キ就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歲以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條　工業主ハ十六歲未滿ノ者及女子ヲシテ一日ニ付キ十二時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ前項ノ就業時間ヲ二時間以內延長スルコト

ヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用セス但シ本法施行十年後ハ十四歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一　一時ニ作業ヲ爲スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

二　夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三　晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

第六條　職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行後五年間第四條ノ規定ヲ適用セス、本法施行五年後左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ更ニ十年間亦同シ但シ本法施行十年後ハ十四歳未滿ノ者ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一　午前零時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業スル組ノ職工員數ヲ他ノ組ノ職工員數ニ比シ初ノ五年間ニ在リテハ十分ノ八以下、次ノ五年間ニ在リテハ十分ノ六以下ノ割合トスルモノ

二　午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ十六歳未滿ノ者及女子ノ就業スル作業時間ヲ初ノ五年間ニ在リテハ四時間以内、次ノ五年間ニ在リテハ二時間以内トスルモノ

第七條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ設ケ、職工ヲ二組ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テハ少クトモ四回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十

分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ク可シ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルトキハ一週間ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換ス可シ

第八條　天災事變ノ爲又ハ事變ノ虞アル場合ニ於テハ主務大臣ハ前五條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條乃至第六條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ屆出テ一月ニ付キ五日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

第九條　工業主ハ十六歳未滿ノ者及女子ヲシテ左ノ各號ニ掲ケタル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

一　蒸汽罐、原動機、電氣機械、動力傳導裝置其ノ他ノ機械若ハ裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、檢査、修繕其他ノ取扱ヲ爲シ又ハ之ニ接近シテ爲ス業務

二　機械又ハ動力傳導裝置ノ運轉中ニ調帶、調索ノ取付又ハ取外ヲ爲ス業務

三　足場、車軸道、梯子其ノ他墜落ノ虞アル場所ニ於ケル業務

第十條　工業主ハ十六歳未滿ノ者ヲシテ左ノ各號ニ掲ケタル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

一　チアン水素酸、チアン化合物、砒素、砒素化合物、水銀、水銀化合物、燐、燐含有物、硫酸、硝酸、鹽酸、苛性カリ、苛性ナトロン其ノ他毒性又ハ劇性ノ物品ヲ取扱フ業務

二　エーテル、ベンヂン、二硫化炭素其ノ他ノ危險性物品ヲ取扱フ業務

三　土石、鑛物、骨角等ノ粉碎、篩別又ハ襤褸綿、麻、獸毛、藁等ノ撰別、梳解、截斷其ノ他ニ依リ著シク塵埃粉末ヲ發散スル場所ニ於ケル業務

四　チアン水素酸砒素、水銀、燐、鉛、亞鉛、クローム、クロール、フルオール、アニリン又ハ其ノ化合物其ノ他ノ毒性物ヲ氣狀若ハ粉狀ニ於テ發散スル場所ニ於ケル業務

第十一條　主務大臣ハ前二條ニ揭ケタル業務ノ範圍ヲ定メ及之ニ準スヘキ業務ニ付前二條ノ規定ヲ適用シ又ハ十六歲以上ノ女子ニ付前條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第十二條　主務大臣ハ病者及產婦ニ付其ノ就業ヲ制限シ又ハ禁止スルコトヲ得

第十三條　行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建設物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衞生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

前項ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第十四條　當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帶ス可シ

第十五條　職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助ス可シ

第十六條　職工、職工タラムトスル者若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工又ハ職工タラムトスル者ノ戶籍ニ關シ戶籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條　職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條　工業主ハ工場管理人ヲ選任スルコトヲ得

工場管理人ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受ク可シ但シ法人ノ理事、會社ノ業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ

在ラス

第十九條　工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ハルモノトス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治產者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テハ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條　第二條乃至第七條第九條及第十條ノ規定又ハ之ニ基キテ發スル命令ニ違背シタル者及第十三條第一項ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條　當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ又ハ臨檢ノ際當該官吏ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス又ハ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條　工業主ハ其ノ代理人、戶主、家族同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違背スル所爲ヲ爲シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

工業主ハ職工ノ年齡ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工業主及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前提出案ニ對スル修正事項

第一　法律適用範圍ニ付勅令ノ委任ヲ削除シ更ニ職工十人以上ノ工場ニ適用スヘキコトヲ規定シタルコト（本案第一條、提出案第一條及第十六條）

第二　工場ニ於ケル就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合トモ之ヲ通算スルノ規

定ヲ設ケタルコト

第三　提出案ハ夜間ト稱スル時間ヲ季節ニ依リテ區別シ之ヲ七時間ト爲シタリシカ本案ハ之ヲ六時間トシ季節ニ依ル區別ヲ廢止シタリ（本案第四條提出案第四條）

第四　夜間作業ヲ必要トスル特殊ノ事由アル業務ニ付幼少者及女子ノ夜間ノ勞働ヲ認ムル範圍ヲ擴張シタルコト（本案第五條第一項第二號提出案第三條）

第五　前記事業ニ付夜間ノ勞働ニ幼少者及女子ヲ使用スルコトニ付左ノ變更ヲ加ヘタルコト（上同）

一　提出案ハ十二歳以上十四歳迄ノ者ニ付法律施行後五箇年迄ヲ限リ夜業ヲ認ムルコトト規定セシカ本案ハ現ニ交替シテ徹夜業ヲ爲シツツアル其ノ他ノ事業（本案第六條）トノ權衡ヲ顧ミ十箇年迄ハ之ヲ認ムルコトト爲シタルコト

二　提出案ハ晝夜繼續作業ヲ要スル事業ニ對シテモ女子ノ徹夜業ヲ禁止シタリシカ（女子ノ使用ハ一時ニ作業スルコトヲ要スル事業ニ限リアリタリ〔提出案第三條第三項〕）本案ハ事業ノ性質上必要ナル以上ハ成年以上ノ女子ニ限リ之カ使用ヲ認ムルコトトセリ

第六　提出案ハ法律施行後十箇年ノ餘裕ヲ置キ十年後ニ於テハ前記特種ノ事業ヲ除クノ外一齊ニ夜業ヲ禁止スル趣旨ナリシカ本案ハ法律施行五年後ヨリ漸次「夜業ニ從事スル職工員數」又ハ夜業ノ時間」ヲ減縮セシメ十五年後ニ至リ全廢ノ實ヲ擧ケシメントス（本案第六條、提出案第三條第三項）

第七　提出案ハ深夜ニ勞働スル職工ノ就業時間、休憩時間、交替及休暇ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトト規定シタリシカ本案ハ之ヲ削除シ就業時間、交替及休暇ニ關シテハ法律中ニ之ヲ規定スルコトトシ休憩時間ニ付テハ法律ノ範圍內ニ於テ工業主自ラ定ムル所ニ委ネタリ（本案第六條及第七條提出案第三條第四項）

第八　提出案ハ幼少者及女子ノ休憩時間ニ付一日ニ十時間ヲ超エサルトキハ少クトモ四十五分間ヲ與フヘシト規定セルモ本案ハ三十分ヲ以テ最低限トセリ（本案第七條提出案第六條）

第九　提出案ハ臨時事業ノ繁忙ナルトキハ許可ヲ得テ就業時間ヲ二時間以內延長スルコトヲ得ル旨ヲ規定セリ然ルニ本案ハ避ク可カラサル事由ニ

依ル必要ニ應スル爲ナルトキハ就業時間延長ノ外夜業禁止若ハ夜業制限ノ解除ヲモ爲スコトヲ得ルコトトシ、又不可避ノ事由ノ有無ニ拘ラス臨時必要アルトキハ一箇月五日ヲ超エサル期間任意ニ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得セシメタリ（本案第四條第二項提出案第七條第二項）

第十　提出案ハ幼少者及女子ヲシテ從事セシムヘカラサル業務ニ付概括的規定ヲ設ケタルニ過キサリシカ本案ハ業務ノ種類ヲ掲記シ其ノ他ノ禁止制限スヘキ業務ニ付大體準據スヘキ標準ヲ規定スルコトトセリ（本案第九條第十條第十一條提出案第八條第九條）

右修正ニ際シテハ前ニモ述フルカ如ク、提出案中命令ニ讓リタル事項ヲ出來得ル丈法律中ニ明規センコトヲ努メタリト雖、工業ノ種類及性質竝事業經營ノ方法千態萬狀ニシテ一々限定詳規センコト殆ント不可能ニ屬スルモノ多キノミナラス、假リニ之ヲ敢テスルモ却テ法律運用上箇々ノ場合ニ於テ其ノ實狀ニ適合セサルモノヲ生スルヲ以テ、尙勅令又ハ命令ニ讓リ又ハ主務大臣ノ裁量ニ委スルノ規定ヲ存置シタルモノ事實已ムヲ得サルニ出テタルナリ。

以上列記シタルモノノ外、提出案ニ修正ヲ加ヘタル重ナル個條ハ工場管理人ニ關スル規定ナリ。本案ニ於テハ工業主ハ工場管理人ヲ置クコトヲ得ヘキモノトシ、工場法遵守上ノ責任者ヲ定メ違反ノ所爲アルトキハ管理人其ノ者ノミヲ處罰スルコトト爲シ、法人ノ經營スル工場ニシテ管理人ナキトキハ重役其ノ他ノ代表者ヲ責任者ト爲スノ主義ヲ採レリ。其ノ斯ノ如キ規定ヲ設ケタル所以ハ、會社其ノ他ノ法人カ經營スル工場ノ管理人ハ假令自己ノ工場ニ非ストスルモ、工場及職工ニ對シテ支配權ヲ有スルコト、其ノ他ノ工業主カ支配權ヲ有スルノ狀態ト異ル所ナキヲ以テナリ。若シ夫レ前提出案ノ如ク法人其ノモノノミヲ罰シテ、事實支配權ヲ有スル個人ノ責任ヲ問ハサルコトトセムカ、法人ノ工場ニ對スル取締ハ個人ノ工場ニ比シテ著シク寬嚴ノ差アルヲ免レサレハナリ。而シテ個人ト雖工業主自ラ工業ヲ管理セサルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ、認可ヲ得テ管理人ヲ置クコトヲ認メタルヲ以テ、此ノ點ニ於テハ兩々責任上ノ取扱ニ差等アルコトナキナリ。（本案第十八條、第十九條提出案第二十一條第二十二條）

諮問案ノ前提出案ト異ナル要點ハ前記ノ如シ、而シテ之ニ對スル地方長官、商業

會議所其ノ他ノ答申ノ大體ハ左ノ如シ

工場法案諮問概表（明治四十三年十一月二十六日調）

提出意見者名 ／ 提出意見事項	警視總監 道廳長官 府縣知事	商業會議所	工業團體其ノ他	合計
照會發送數	四八	六〇	七	一一五
回答到着數	四八	六〇	七	一一五
全部贊成又ハ異議ナキモノ	三四	一七	〇	五一
大體ニ於テ贊成ナルモ修正意見ヲ提出シタルモノ	一四	四二	七	六三
制定ノ時機尚早シトスルモノ	—	一	—	一

諮問ノ成績前表ノ如ク、制定ノ時機尚早シトスルモノハ僅ニ一アルノミニシテ其ノ他ハ大體ニ於テ法律制定ノ必要ヲ認ムルニ至リタルハ偶〻以テ大勢ノ推移スル所ヲ知ルニ足ルヘシ

修正意見中其ノ重ナルモノノ内容ヲ略述スレハ、第一條ニ規定スル法律ノ適用

範圍ニ關シテハ最モ異見多ク第一號ノ『原動力ヲ用ウルモノ』ニ對シ『原動力ヲ用ヰ常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ』トスルコトヲ希望シ、或ハ此ノ人員ヲ五人以上トシ或ハ二十人以上トセルモノアリ、又第一號ト第三號ノ『常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ』トヲ合シテ單ニ『常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ』ト修正シタルモノアリ。又第三號ニ對シテハ『常時二十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ』ト修正シタルモノ最モ多ク、更ニ此ノ人數ヲ高メテ三十人以上トシタルモノアリ。其ノ他第二條ノ職工ノ最低年齡ノ制限ニ對シテハ十二歳未滿トアルヲ單ニ十三歳未滿トシ、或ハ十二歳未滿トスルト共ニ義務教育未修了者ニ對スル教育方法ノ規定ヲ追加スルコトヲ希望セルモノアリ。第三條ノ十六歳未滿ノ者及女子ノ就業時間ヲ一日ニ付十二時間以内トスル規定ニ對シ、十三時間又ハ十四時間トシ、或ハ十六歳未滿ヲ十四歳又ハ十五歳未滿トスルモノアリ。又同條第二項ノ就業時間ヲ二時間以内延長シ得ル規定ニ對シ、之ヲ三時間又ハ四時間ト修正セントシ、或ハ反對ニ時間延長ニハ女子ヲ除クヘシトシ、或ハ時間延長ハ本法施行後十年間ニ限ルヘシト謂フモノアリ。第四條及第五條ノ夜間勞働ノ禁止又ハ制限ニ對シテハ、夜

問ト稱スル時間ヲ短縮セントスルアリ、或ハ之ヲ增加セントスル意見モアリ、其ノ他職工使用上ノ禁止又ハ制限ヲ受クル幼少者ノ年齡ニ對シテハ少數者ノ意見ノ發表アリ。而シテ前期提出案中修正箇條ノ大眼目トモ見ルヘキ夜業ノ漸禁ヲ規定スル第六條ニ付テハ、其ノ第一項第一號及第二號ニ揭クル條件ニ從ヒ夜業全禁ノ實施期ヲ通計十五箇年後トシタルニ拘ラス、紡績業者ハ斯ノ如キ漸禁條件ヲ遵奉シテ作業スルコトハ實際ニ於テ甚タ困難ナルノミナラス其ノ取締又至難ナルヘシトノ理由ニ依リテ同條ノ『本法施行後五年間第四條（夜業禁止）ノ規定ヲ適用セス』ノ『五年間』ヲ『十五年間』ト修正シ、其ノ間何等ノ條件ヲ置カサルコトヲ希望シ、商業會議所數箇所及日本工業協會等亦之ト意見ヲ同ウシ、無條件ニテ此ノ『五年間』ヲ『十五年間』ト修正シタリ。其ノ他此ノ條項ニ關シ前年ノ提出案通リ十年後ノ禁止ニテ差支ナシト答申シタルモノハ二縣知事四會議所及一學會ナリ。第九條第十條ノ幼少者及女子ニ對シ禁止スヘキ業務ノ種類ノ規定ニ付テハ諮問案ハ詳密ニ過クル嫌アルヲ以テ、前年提出案ノ如ク概括的ニ規定スルコトヲ希望シタルモノ多ク、此ノ外第七條ノ休日、休憩、第八條ノ非常ノ場合ニ對スル規定其ノ他ニ付各多少ノ修正意見アリ。尙中央衞生會ハ第十條ノ藥品名ノ意義ヲ明カニスル爲之ニ對シテ一二ノ修正ヲ爲シタル外諮問案全部ヲ是認セリ。

翻テ前記各種ノ答申案ヲ審査シタル後、會議ヲ開始シタル生產調査會ハ本案ノ審査ヲ男爵澁澤榮一氏ヲ委員長トセル十七名ノ特別委員ニ附托セリ。委員會ハ別ニ紡績業者、製絲業者、印刷業者及醫師等ノ實際家ヲ招キテ親シク其ノ意見ヲ聽キ、數回ノ委員會ヲ開キ、審議ノ末法律ノ適用範圍其ノ他ニ對シ修正ヲ加ヘタリ。修正ノ要綱左ノ如シ。

（一）法律適用ノ範圍ニ關スルモノ、

諮問案第一條第一項ハ勅令ノ指定ニ依リ初メテ適用ノ範圍明確トナルモノニシテ、勅令ノ出ツルニアラサレハ其ノ範圍ノ廣狹全ク不明ナリ。故ニ各號ノ一ニ該當スルモノニハ總テ適用スルヲ原則トシ、勅令ヲ以テ適用ヲ要セサルモノヲ除外スル方可ナリトノ理由ニテ第一項ヲ修正シ。尙原動力ヲ用ウルモノハ職工ノ員數ヲ問ハス總テ之ヲ取締ルカ如キ必要ナシトテ、第一號ヲ削リ唯十人以下ノ職工ヲ使用スル工場ニシテ原動力ヲ用ウルモノニハ婦女幼少者ヲシテ

危險ナル業務ニ就カシメサル規定、工場竝設備ニ關スル處分規定及此等規定ノ施行ニ必要ナル條項ニ限リ本法ヲ適用スルコトトセリ。

(二)被保護職工ノ年齢ノ低減ニ關スルモノ

諮問案中一日ノ就業時間、夜間ノ就業、休日、休憩、危險又ハ衛生上有害ノ業務ニ就カシメサル規定ヲ適用スヘキ少年工ノ年齢ハ十六歳未滿ナリシカ總テ之ヲ十五歳未滿ト修正セリ、

(三)第三條ノ就業時間延長ニ關スルモノ

業務ノ種類ニ依リ婦女幼少者ノ十二時間ノ就業ヲ十四時間ニ延長シ得ルノ規定ヲ「十五年間ニ限リ」効力アルモノト爲シタルコト

(四)第五條ノ夜業禁止年限延長ニ關スルモノ、

第五條ニ掲クル特殊業務ニ對シ「十年後」ニハ十四歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子ノ夜業ヲ禁止スヘキ旨ノ規定ヲ修正シテ「十五年後」ノ禁止ニ延長セリ

(五)第六條ノ夜業漸禁ニ關スルモノ、

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テ、法定條件ヲ遵奉スル以上ハ十五年間婦女幼少者ノ夜業禁止規定ノ適用ヲ猶豫スヘキ旨ノ案ニ對シ、此ノ條件ノ實行ト其ノ取締ハ甚タ困難ナリトノ理由ニ依リ、何等特殊ノ條件ヲ設ケスシテ十五年間ハ夜業ヲ禁止セスト修正セリ、

(六)婦女幼少者又ハ幼少者ノミニ對シテ禁止スヘキ業務ノ種類ニ關スルモノ

諮問案ハ較「具體的」ニ業務ノ種類ヲ列擧シタルモ、此ノ如キ事項ハ法律ニ於テハ其ノ大體ノ精神ノミヲ掲ケ、細密ノ規定ハ之ヲ命令ニ讓リテ適用上遺漏ナキヲ期スル方可ナリトシ、之ヲ修正シテ略ホ前年ノ提出案通リトセリ、

以上ハ生產調査會ノ修正事項ノ重ナルモノナリ。此ノ外臨時必要アル場合ニ行政官廳ニ屆出テ就業時間ヲ延長シ得ヘキ日數一月ニ付五日ヲ七日ト改メ、又罰金額ノ輕減其ノ他ニ付修正ヲ加ヘタリ。

生產調査會カ前記ノ修正ヲ爲スニ當リテハ、地方長官及各團體等ノ答申意見ノ外、立案者ノ說明ヲ十分ニ聽取シタルモノナルヲ以テ、其ノ修正ハ大體ニ於テ同意ヲ表スヘキモノナリト認メ、更ニ內務省トノ合議ヲ經テ閣議其ノ他ノ手續ヲ完了シ、二月二日ヲ以テ第二十七議會衆議院ニ提出スルコトトナレリ。

衆議院ハ大岡育造氏ヲ委員長トスル十九名ノ特別委員ニ附托シ、委員會ハ開會六回ニ亘リ討論審議ノ末、法律適用ノ範圍其ノ他ノ條項ニ付別記ノ如ク修正ヲ加ヘ本會議ニ報告セリ。然ルニ本會議ハ第一條第一號適用範圍ノ規定事項中、委員會カ「常時二十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」ト修正シタルヲ、更ニ「常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」ニ改メタルノミニテ、他ハ全部委員會ノ決議案ヲ是認シ大多數ヲ以テ之ヲ通過シタリ。

同法案ハ更ニ三月二日ヲ以テ貴族院ニ提出セラレ、同院ニ於テハ子爵三島彌太郎氏ヲ委員長トセル十九名ノ特別委員ノ審査ニ付セラレ、會議ヲ重ヌルコト六回大多數ヲ以テ衆議院ノ修正ヲ是認シ、三月二十日ヲ以テ本會議ニ報告セラレタリ。而シテ本會議モ亦大多數ヲ以テ修正案ヲ議決シ、茲ニ三十年來ノ懸案タリシ工場法案ノ協賛ヲ得ルニ至リ、四十三年三月二十八日ヲ以テ立法ノ手續ヲ完了セラレタリ。左ニ提出案ニ對スル議會ノ修正箇條ト提出案全文（修正條項添付）ヲ記シテ本節ヲ終ルヘシ。

議會修正ノ要綱

（一）第一條第一項第一號ノ『常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ』ノ十人以上ヲ十五人以上ト修正シテ、適用範圍ヲ縮小セリ。其ノ理由トスル所ハ夜業禁止ノ規定其ノ他重要ナル規定ヲ實際施行セラルルハ十五年ノ後ニシテ、此ノ如ク重大ナル規定ノ適用ヲ受クルモノハ紡績工場其ノ他ノ大工場ニ多キヲ以テ、大工場ハ法律ノ適用ヲ十五年猶豫セラレタルモノト同然ナレハ、職工年齢、就業時間、扶助等ニ付從來何等ノ規律ナク、法律施行ノ影響スルコト大ナルヘキ小工場ニ對シテモ相當ノ特典ヲ設ケサルヘカラス。故ニ十人乃至十五人未滿ノ職工ヲ用ウル小工場ハ法ノ適用外ニ立タシムルヲ可トスト謂フニアリ。

（二）第七條第二項職工ヲ二組以上ニ分チ交替法ニ依リテ夜間就業セシムル場合ニハ、晝夜兩番ノ就業時ハ七日ヲ超エサル期間毎ニ轉換スヘキ規定ヲ十日ヲ超エサル期間ニ轉換スヘキコトニ改メタリ。之ニ依リ工業主ハ或時ハ四五日ヲ經テ轉換シ、又或時ハ十日目ニ轉換シ得ルヲ以テ、轉換日ノ撰擇便利トナリタルモ、同條第一項ニ於テ一ヶ月四回ノ休日ヲ與フヘキコトヲ規定セルヲ以テ此ノ修正ハ必スシモ原案ノ精神ヲ失ハシメサルナリ。

(三)第八條第二項ニ於テ就業時間ヲ二時間以内延長シ得ル期間ハ一月ニ付七日ヲ超ユルコトヲ得ストセリ。此ノ規定ハ一般ニ對シテハ何等不便ナキモ、氣候ノ關係等ニ依リテ一周年中或季節ハ全ク事業ヲ休止シ、他ノ季節ニ於テ成ル可ク長時間ノ作業ヲ爲シテ之ヲ補フコトヲ要スルモノアルヲ以テ、第三項トシテ季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ一定ノ期間ニ付認可ヲ受ケテ、其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ニ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長シ得ル規定ヲ設ケタリ。

(四)以上ノ外第十八條ノ工場管理人ニ關スル規定ヲ提出案ト生産調査會ニ對スル諮問案トヲ合シタルモノニ改メタリ。

第二十七議會提出工場法及修正箇條（小字及――ハ議會修正）

第一條　本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス

一　常時十五人以上職工ヲ使用スルモノ

二　事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衞生上有害ノ虞アルモノ

本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

第二條　工業主ハ十二歳未滿ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歳以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ本法施行後十五年間ヲ限リ前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用セス但シ本法施行十五年後ハ十四歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一　一時ニ作業ヲ爲スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

二　夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三　晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

第六條　職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行後十五年間第四條ノ規定ヲ適用セス

第七條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ設ケ、職工ヲ二組ニ交チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テハ少クトモ四回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設クヘシ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルトキハ一週間（十日）ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換スヘシ

第八條　天災事變ノ爲又ハ事變ノ虞アル爲必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ事業ノ種類及地域ヲ限リ第三條乃至第五條及前條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條及第五條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ屆出テ一月ニ付七日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第九條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、檢査若ハ修繕ヲ爲サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ爲サシメ其ノ他危險ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十條　工業主ハ十五歳未滿ノ者ヲシテ毒藥、劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性若ハ引火性ノ料品ヲ取扱フ業務及著シク塵埃粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務其ノ他危險又ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十一條　前二條ニ揭ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム

前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十五歳以上ノ女子ニ付之ヲ適用スルコトヲ得

第十二條　主務大臣ハ病者又ハ產婦ノ就業ニ付制限又ハ禁止ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十三條　行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

第十四條　當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帶スヘシ

第十五條　職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

第十六條　職工・徒弟・職工・徒弟・タラムトスルモノ若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工・徒弟・又ハ職工・徒弟・タラムトスル者ノ戸籍ニ關シ戸籍吏ニ對シ無

償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條　職工ノ雇入解雇周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條　工業主（工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任スルコトヲ得）ハ本法施行區域内ニ現住セサルトキハ工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任スルコトヲ要ス

工業主本法施行區域内ニ居住セサルトキハ工場管理人ヲ選任スルコトヲ要ス

工場管理人ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ但シ法人ノ理事、會社ノ業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役

工業主ハ特別ノ事由アル場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ認可ヲ受ケ前項ノ工場管理人ヲ選任スルコトヲ得

業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條　前條ノ工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ルモノトス但シ第十五條ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治産者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事、業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條　第二條乃至第五條、第七條、第九條又ハ第十條ノ規定ニ違反シタル者及第十三條ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條　正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ若ハ其ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス（サス）又ハ虚僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條　工業主、（又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者）ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反スル所爲ヲ爲シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

工業主、（又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者）ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

但シ工業主、（又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者）及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條　本法ニ依ル行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條　主務大臣ハ第一條ニ該當セサル工場ニシテ原動力ヲ用フルモ

ノニ付テハ第九條、第十一條、第十三條、第十四條、第十六條及第十八條乃至第二十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第二十五條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四節　第四期（自明治四十四年至大正五年）

第一項　施行ニ至ル迄ノ經過

工場法カ帝國議會ノ協贊ヲ經タルハ實ニ明治四十四年三月二十日ニシテ、第二十七議會ノ閉會ノ日ヲ距ルコト僅カニ一日ニ過キス、到底法律施行ニ必要ナル費用ハ之ヲ當年ノ追加豫算ニ計上スルノ遑ナク、其ノ實施ハ之ヲ他日ニ俟ツノ外ナカリシナリ。此ヲ以テ當局者ハ明治四十六年四月一日ヨリ實施スルノ計畫ヲ立テ明治四十五年度概算書ニ同法施行準備ニ要スル經費一萬六千三百五十七圓ヲ農商務本省費ニ計上シタルモ大藏省ニ於テ削除サレタリ、襄テ大正二年度豫算ニ於テハ、大正四年四月一日ヨリ實施ノ豫定ヲ以テ之カ施行準備ニ要スル經費九千六百七十七圓ヲ農商務本省費ニ計上シタルモ亦大藏省ノ認ムル所トナラス、大藏省ニ於テ削除サレタルコト再度ニ及ヒタルヲ以テ、大正三年度ニ於テハ最小限度ノ施行準備ヲ爲スコトトシ、八千百五十二圓ヲ農商務本省費ニ計上シ之レカ支出ノ要求ヲ爲シタルモ亦閣議ノ容ルル所トナラス、三度施行ヲ延期スルノ已ムナキニ至レリ。是レ歴代ノ內閣カ孰レモ財政整理ヲ標榜シ、新事業ハ一律ニ否認スルノ方針ヲ採リタルカ爲ナリト雖、而モ事實ニ於テハ此ノ間西園寺、桂、及山本ノ諸內閣ハ孰レモ豫算ヲ成立セシムルニ至ラサリシヲ以テ、假令豫算ニ計上スルコトヲ得タリトスルモ此ノ期間內ニ工場法ハ施行ノ運命ヲ迎フルニ由無カリシナリ。

大正三年四月、大隈內閣成リ、社會政策ノ施行ヲ標榜シテ其ノ政綱ノ一項目ト爲シタル同志會ノ領袖、大浦子爵竝河野廣中氏相繼テ農商務大臣トナルヤ、大正四年

度豫算ニ於テハ大正五年一月ヨリ實施ノ見込ヲ以テ施行準備トシテ農商務本省費ニ二萬百十五圓、廳府縣工場監督費ニ七萬七千六百四十四圓ヲ計上シタルモ帝國議會解散サレ本費ノ成立ヲ見ルニ至ラサリキ。然レトモ數次ノ行政整理ノ後ヲ承ケ、而モ明治四十四年度ノ「形式豫算」ニ比シ、著シク支出ノ減額セル「實行豫算」ヲ施行スルノ結果莫大ナル剩餘金ヲ殘存シアリタルカ故ニ此ノ剩餘金ノ支出ニ依リ大正五年一月一日ヨリ實施ノ豫定ヲ以テ工場法施行準備費トシテ、大正四年度實行豫算中ニ、農商務省ハ其所管ニ於テ一萬三千百五十七圓、廳府縣所屬ノモノ二萬七百十五圓ヲ配付スヘキ旨大藏省ノ通知ニ接シタリ。大正五年度概算ニ於テハ農商務本省費中ニ一萬九千三百五圓、廳府縣所屬ニ二十一萬七千六百七十七圓ヲ計上シタルニ大藏省ハ廳府縣所屬ノ分ニ於テ二萬九十五圓ヲ査定削減シタルカ豫算ハ茲ニ初メテ全部兩院ノ協賛ヲ得、施行費ノ成立ヲ見ルニ至レリ。

大正四年ニ於テ工場法施行準備費ノ實行豫算ニ計上セラルヽヤ、當局者ハ翌五年度ニ於テ萬一豫算不成立ト爲ルトスルモ尙前年度豫算施行ヨリ生スル餘剩金ノ支出ニ依リ必ス法律ノ實施セラルヘキヲ確信シ、一面ニ於テハ工場監督ニ關スル行政上ノ組織ニ付審議ヲ進ムルト共ニ監督官養成ニ關スル計畫ヲ立テ、他ノ一面ニ於テハ法律發布當時ヨリ懸案トナリ居リタル施行勅令及施行規則ノ立案審議ヲ急キタリ。即大正四年四月大藏省ノ通知ニ接シタル以後稿ヲ更フルコト實ニ數十回、同年八月ノ交一應ノ草案成リタルヲ以テ九月主要工業府縣工場主任官會議、十月主要官立工場主任官會議ヲ開催シ、施行命令規定事項ニ付反覆審議ヲ爲シ、其ノ結果更ニ修正案ヲ得タルヲ以テ其ノ規定事項ノ主要部分ニ付地方長官、商業會議所、工業團體、社會政策學會等ニ諮問シ、其ノ答申ニ付更ニ愼重審議ノ末修正ヲ加ヘ、就中衞生事項ニ關シテハ大正五年四月中央衞生會ニ諮詢セリ。是ヨリ曩キ、同年一月工場法ハ大正五年六月一日ヨリ施行スヘキ勅令ノ公布セラルルアリ、四月末、中央衞生會ヨリノ答申ヲ俟テ更ニ叮嚀反覆審議ノ結果成案ヲ得、五月工場法施行令案ヲ閣議ニ提出、同月樞密院ヘ御諮詢アリタルモ、同案ヲ一先ツ撤回セリ、其ノ結果工場法施行期日ヲ變更スルノ已ムヲ得サルニ至リ、五月末日ヲ以テ工場法ハ大正五年九月一日ヨリ施行スヘキ勅令公布セラレ、爾來樞密院關係各省ト更ニ數次ノ協議ヲ重ネ、六月更ニ閣議ニ提出其ノ後再度樞密院ヘ御諮詢アリ、遂ニ大

正五年八月三日ヲ以テ工場法施行令ハ勅令第一九三號ヲ以テ公布セラレ、工場法施行規則及之ニ伴フ訓令モ亦同時ニ發布セラレタリ。工場法施行命令ノ發布ニ至リタル大體ノ經過ハ上述ノ如シ、尙工場法ノ施行ニ關スル行政機關設置ノ經過ハ概ネ左ノ如シ。

大正四年度ニ於テ施行準備費ノ配付ヲ受クルヤ、商工局工務課ニ於テ諸般ノ準備ニ着手セシカ之カ事務日々繁激ヲ加ヘ來リシヲ以テ、大正四年十月、農商務省分課規程ヲ改正シ、商工局ニ工場課ヲ特設シ工務課ヨリ分離獨立セシメタリ。同年十二月、農商務省官制改正セラレ工場法施行ニ關スル事務ヲ掌ル爲本省ニ工場監督官(奏任)專任四人、工場監督官補(判任)專任五人ヲ置クノ勅令公布セラレ、亞テ大正五年一月、地方工場監督職員ニ關スル官制ノ改正アリ、主要工業府縣ニハ奏任官タル工場監督官ノ外、判任官タル工場監督官補ヲ、爾餘ノ縣ニハ判任官タル工場監督官補ヲ配置スルニ至レリ。尤モ大正四年度ニ於テ任命セラルヽハ工場法施行ニ關シ廳府縣ニ於ケル主任官タルヘキノミニシテ、大正五年度ニ於テ全部ノ職員ヲ補充スルノ計畫ナリ、而シテ官制定マリ諸員ノ任命ヲ了スルヤ、大正五年二月ヨリ三月ニ渉リ五十四日間、本省ニ於テ、廳府縣工場監督主任官講習會ヲ開催シ、地方工場監督主任官トシテ必須ノ事項ヲ講習セリ。工場法施行ノ經過竝工場監督主任官講習科目ヲ表示スレハ左ノ如シ。

工場法施行準備ノ經過

大正四年度豫算　不成立(大正五年一月一日ヨリ施行ノ豫定)

大正四年四月二日　大藏省ヨリ實行豫算中施行經費配付ノ通知アリ

同　八月三十日　官私百五十餘工場ニ對シ職工ノ負傷疾病ノ扶助休日、休憩、就業時間、職工名簿等ニ關シ調査ノ爲通牒ヲ發ス

同　九月十三日(自十三日至二十日)東京、大阪、兵庫、愛知、長野、石川、福岡等重要工業府縣ノ工場主任官會議

同　九月十八日　農商務省官制中改正ノ件閣議稟請

同　十月四日(自四日至五日)　印刷局、鐵道院、專賣局、遞信省、陸軍省、海軍省、等諸官廳所管工場主任官會議

同　十月五日　工場法ノ適用ヲ受クル工場及職工ニ關スル臨時調査ノ通牒ヲ發ス

同　十月十日　施行期日ニ關スル勅令閣議稟請

同　十月十八日　工場法施行令規定中重要事項ニ關シ各地方長官、工業團體、商業會議所等ヘ諮問シ且ツ官立工場所管各省ヘ協議

同　十月二十一日　商工局ニ工場課新設

同　十二月二十二日　職工扶助令規定事項ニ關シ各地方長官、工業團體、商業會議所等ヘ諮問シ且官立工場所管各省ヘ協議

同　十二月二十五日　農商務省官制中改正

同　十二月二十八日　農商務省工場監督官任命

大正五年一月二十五日　工場法施行期日ニ關スル勅令公布

同　三月上旬　地方工場監督官設置ニ關スル官制公布
曩ニ各方面ヘ諮問セル答申略出揃

同　四月四日　中央衛生會ヘ諮問

同　四月二十七日　中央衛生會答申

同　五月一日　工場法施行令閣議提出

同　五月九日　閣議決定

同　五月十一日　樞密院ヘ御諮詢

同　五月三十日　御諮詢案撤回

同　五月三十日　施行期日變更勅令ノ發布

同　六月九日　修正施行令閣議決定

同　六月十日　樞密院ヘ御諮詢

同　六月二十六日　樞密院奉答

同　八月二日　施行令及施行規則公布

同　九月一日　工場法實施

工場監督主任官講習科目

工場法規

工業經濟（社會政策論ヲ含ム）

工場管理法
機械概論
電氣概論
製糸
織物、染色、整理、編物、組物
製紙
酸「アルカリ」、染料、瓦斯（瓦斯ノ副產物）骸炭
製糖、醸造
肥料
皮革
鑛工場衛生
鐵工業
建築概論
紡績
窯業製品
護謨、顏料、塗料
藥品、電氣化學、鑛油
「セルロイド、油脂、石鹼、グリセリン」
脂肪酸、燐寸、揮發性植物油
火藥、爆發藥
印刷

鑛ヲ大正五年度豫算ニ於テ議會ノ正式協賛アリタル工場法施行經費ハ、全額二十一萬六千八百餘圓ニシテ之レニ從事スル職員ハ、高等官二十一人、判任官百七十八人、合計百九十九人ニシテ道廳及各府縣別ニ配置セラレ、別ニ農商務省ニハ、高等官四人、判任官五人ノ專任監督官吏ヲ置クカ故ニ、總計二百八人ノ專任官吏、工場監督ノ衝ニ當ル、尙ホ補助員タル雇員傭員ハ此ノ以外トス。而シテ、工場法ニ依リテ監督ヲ受ルモノハ大正五年末ノ調査ニ依レハ工場數約一萬八千有餘職工數約百十二萬ヲ算ス。今各地方ニ於ケル監督官吏配置ノ狀況ヲ表示スレハ左表ノ如シ。

（工場監督ノ組織ニ付テハ第七章參照）

廳府縣工場監督職員配置表（大正五年度豫算）

區別	奏任 事務	奏任 衛生	奏任 技術	奏任 計	判任 事務	判任 衛生	判任 技術	判任 計	合計
北海道	一	一	一	一	一	一	一	三	四
東京	一	一	一	一	二	二	五	九	一二
京都	一	一	一	一	一	一	三	五	七
大阪	一	一	二	二	三	三	六	一二	一六
神奈川	一	一	一	一	一	二	四	七	八
兵庫	一	一	一	一	三	一	五	七	一〇
長崎	一	一	一	一	一	一	一	三	四
新潟	一	一	一	一	一	一	一	三	四
埼玉	一	一	一	一	一	一	一	三	四
群馬	一	一	一	一	一	一	一	三	四

千葉	—	—	—	—	一	一	一	三	三
茨城	—	—	—	—	一	一	一	三	三
栃木	—	—	—	—	一	一	一	三	三
奈良	—	—	—	—	一	一	一	三	三
三重	—	—	—	—	一	一	二	四	四
愛知	一	一	一	三	一	一	五	七	一〇
靜岡	一	—	—	一	一	一	三	五	六
山梨	—	—	—	—	一	一	一	三	三
滋賀	—	—	—	—	一	一	一	三	三
岐阜	一	—	—	一	一	一	三	五	六
長野	一	一	—	二	一	一	二	四	六
宮城	—	—	—	—	一	一	一	三	三
福島	—	—	—	—	一	一	一	三	三
巖手	—	—	—	—	一	一	—	二	二
青森	—	—	—	—	一	一	—	二	二
山形	—	—	—	—	一	一	一	三	三
秋田	—	—	—	—	一	一	—	二	二
福井	—	—	—	—	一	一	三	五	五

石川	—	—	—	—	一	一	二	四	四
富山	—	—	—	—	一	一	一	三	三
鳥取	—	—	—	—	一	一	—	二	二
島根	—	—	—	—	一	一	一	三	三
岡山	—	—	—	—	一	一	二	四	四
廣島	—	—	—	—	一	一	二	四	四
山口	—	—	—	—	一	一	一	三	三
和歌山	—	—	—	—	一	一	一	三	三
德島	—	—	—	—	一	一	一	三	三
香川	—	—	—	—	一	一	一	三	三
愛媛	—	—	—	—	一	一	二	四	四
高知	—	—	—	—	一	一	一	三	三
福岡	—	—	—	—	一	一	三	五	五
大分	—	—	—	—	一	一	一	三	三
佐賀	—	—	—	—	一	一	一	三	三
熊本	—	—	—	—	一	一	—	二	二
宮崎	—	—	—	—	一	一	—	一	二
鹿兒島	—	—	—	—	一	一	—	二	二

沖縄	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二
計	一〇	六	五	二一	五〇	五二	七七	一七六	一九九

右ハ大正五年度ニ於ケル配付ナルカ、大正六年度ニ於テハ岐阜縣ノ高等官一名ヲ福岡縣ニ移シタル外他ニ異動ナカリシ。

工場法規ノ說明　工場法施行ノ當初ニ於テハ、當業者ニ法ノ精神ヲ領得セシメ、其ノ內容ニ通セシムルコトハ最モ切要ノコトタル言ヲ俟タス、玆ニ於テ商工局長以下當該職員ハ法令施行前ヨリ屢各地方ニ出張シ、地方廳ト協力シテ講演ニ協議會ニ法律ノ精神ト其ノ內容ノ普及ニ努メ、施行令公布後ハ一層法令ノ內容ヲ明ニスル爲「工場法規ノ說明」ナルモノヲ刷行シ、各地方廳、商工業團體等ニ配付シ地方廳ハ更ニ之ヲ複製シテ當業者ニ頒布セリ。如此種々ノ方法ニ依リ法規ノ說明ニ努メ、各地方廳亦工場法施行ニ關スル廳府縣令ノ發布ト共ニ、各所ニ講話會ヲ開催シ、法規ノ普及ニ遺憾ナキヲ期シ、法令施行後四ヶ月間ハ專ラ此ノ方面ニ主力ヲ傾注シタリ。

第二項　工場法施行令

一、施行令ノ內容　工場法施行令ハ五章四十二條ヨリ成ル、次章工場法令ノ內容ノ題下ニ之ヲ詳論スヘシト雖、今其ノ梗概ヲ記述スレハ左ノ如シ。

第一章　通則

本章ハ工場法第一條ノ委任又ハ補充命令トシテ工場法適用ノ範圍ヲ定ムルモノニシテ、第一條及第二條ニ於テ工場法ノ適用ヲ除外スル工場ヲ列記シ、第三條ニ於テハ工場法ノ適用ヲ受クヘキ工場ヲ指定セリ。

第二章　職工又ハ其ノ遺族ノ扶助

本章ハ工場法第十五條ノ委任命令ニシテ扶助義務ノ性質(第四條)、扶助ノ種類及程度(第五條乃至第九條)、遺族扶助料ヲ受クヘキ者ノ順位(第十條乃至第十二條)、扶助ノ支給方法(第十三條、第十五條乃至第十七條)、扶助規則(第十九條)、扶助ニ關スル爭議ノ調停(第十八條)、扶助義務ノ消滅(第十四條)等扶助ニ關スル一切ノ事項ヲ規定シ其ノ關係スル所頗ル廣汎ナリ。

第三章　職工ノ雇入、解雇及周旋

本章ハ工場法第十七條ノ委任命令ニシテ、職工名簿(第二十一條)、賃金ノ支拂方法及職工ノ貯蓄金ノ管理ニ關スル制限(第二十二條乃至第二十五條)、學齢兒童ノ就學ニ關スル事項(第二十七條)、及歸郷旅費ノ支給(第二十七條)ニ關スル事項ヲ規定ス、而シテ本章中職工ノ雇傭周旋ノ取締ニ關スルモノ多カラスト雖本章第二十七條ノ一部竝第五章罰則中第一項第二號、第二項ノ一部、及第三十四條ハ雇傭周旋ノ取締ニ關スル事項ヲ規定スルモノナリ。

第四章　徒弟

本章亦工場法第十七條ノ委任命令ニシテ、徒弟ノ要件及認可(第二十八條、第二十九條、第三十條)竝徒弟ノ就業及就學(第三十一條及第三十條)ニ關スル事項ヲ規定シタリ。

第五章　罰則

罰則ハ第三十三條乃至第三十五條之ヲ規定ス而シテ本章ハ工業主ハ其ノ使用人ノ所爲ニ付テハ、原則トシテ其ノ責ヲ免ルル能ハサルコトヲ明カニシタリ。(第三十六條)

附　則　中主要ナルモノハ賃金ノ支拂、貯蓄金ノ管理、職工名簿及扶助規則ノ作製等ニ付一定ノ猶豫期間ヲ與フルヲ以テ主旨トセリ。

二施行令制定ニ際シ問題トナリシ事項

(一)工場法適用ノ範圍ニ關スル事項

(1)常時十五人以上ヲ使用スル工場中適用ヲ除外スヘキ工場(令第一條、第四章第三節第三項參照)

(2)危險有害工場ノ範圍(令第三條、第四章第三節第二項參照)

(二)扶助ノ程度及種類ニ關スル事項　(第四章第五節參照)

(1)扶助ノ程度

(2)扶助ノ種類

(3)傷害ノ程度及之ニ對スル扶助金額

(4)遺族扶助料ヲ受クヘキ者ノ順位

(5)同順位者數人アル場合ノ關係

(三)扶助ト損害賠償トノ關係

(四)扶助ニ關スル地方長官ノ審査及調停

(五)扶助ト救濟組合トノ關係
(六)貯蓄金ノ管理ニ關スル事項
(七)學齢兒童ノ雇傭ニ關スル事項
(八)徒弟ニ關スル事項

三施行令中ノ諮問事項

施行令中最モ重要ナル事項トシテ關係各省、各地方長官、商業會議所、社會政策學會、工業協會、中央衞生會等ヘ協議若ハ諮問シタル事項ニ付テハ次項ヲ參照スヘシ。

第三項　工場法施行規則

一工場法施行規則ノ內容　施行規則ハ三十一條ヨリ成ル、其ノ詳細ハ次章ニ於テ之ヲ述フヘシト雖、今其ノ梗概ヲ記述スレハ左ノ如シ。

(一)法律ノ委任ニ基ク規定

(1)生絲工場及輸出絹織物工場ニ於ケル就業時間ノ延長(法第三條)(則第三條)
附織物及編物業ノ就業時間ノ延長
(2)中夜作業ヲ許サルル特殊工業ノ指定(法第五條)(則第四條)

(3)危險業務ノ範圍ノ指定(法第九條)(則第五條)
(4)危險又ハ有害ナル場所ノ範圍ノ指定(法第十條及第十一條)(則第六條第七條)
(5)病者又ハ產婦ノ就業禁止(法第十三條乃至第十條)(則第八條乃至第十條)
(6)工場臨檢票樣式(法第十四條)(則第十一條)
(7)工場管理人ノ認可申請及屆出(法第十八條)(則第二十一條及第二十二條)

(二)工場法施行令ノ委任ニ基ク規定

(1)原動機ノ指定(令第一條)(則第一條)
(2)職工名簿(令第二十一條)(則第十六條)
(3)賃金支拂及貯蓄金ノ返還(令第二十三條)(則第二十條)
(三)備付書類及職工ニ關知セシムヘキ事項(則第十二條及第十三條)(第十七條乃至第十九條)
(四)許可、認可申請及屆出手續(則第二條、第二十一條、第二十二條乃至第二十四條)
(五)罰則(則第二十五條乃至第二十七條)
(六)其ノ他(則第十四條第十五條)

二施行規則制定ニ關シ問題トナリシ事項

(一)法第二條ニ基ク就業時間ノ延長　(第四章第四節第四項參照)
(二)病者使用禁止ニ關スル事項　(第四章第四節第三項參照)
(三)職工負傷月報ニ關スル事項　(第四章第十一節參照)

三關係各官廳其ノ他ノ民間諸團體ニ協議又ハ諮問シタル事項

病者及產婦ノ使用禁止ニ付テハ施行勅令ニ關スル事項ト共ニ關係各官廳及民間諸團體ニ之ヲ諮問シタリ。

施行命令ノ諮問　施行令及施行規則中主要ナル事項ニ付テハ左記七案及扶助ニ關スル事項ヲ關係各官廳其ノ他民間諸團體ニ協議又ハ諮問ヲ爲シタルカ之カ爲メニ照會ヲ發送シタルモノ百十八、之ニ對シテ回答ヲ爲ササルモノ三アリ、回答ヲ爲シタルモノノ內異議ナキモノ四十一、意見アルモノ七十四ヲ算セリ、而シテ此等ノ意見ヲ其ノ內容ニ依リテ大別スレハ。

第一號　三六　第二號　三四　第三號　二〇
第四號　二〇　第五號　一五　第六號　二六
第七號　八　一般的　一二

ニシテ尙之ヲ細別スレハ左ノ如シ。

第一號

常時十五人以上ノ職工ヲ使用セスト雖、事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衞生上有害ノ虞アルモノニシテ工場法ノ適用ヲ必要トスル工場、但シ常時使用スル職工五人ニ滿タサルモノニ在リテハ地方長官ノ告知シタルモノニ限ル。(工場法第一條第一項第二號參照)

毒劇物、毒劇藥製造工場
動物剝製工場
金屬熔融工場
水銀ヲ用フル計器製造工場
燐寸製造工場
金屬精煉工場
火藥、爆藥、火工品製造及取扱工場
塗料、顏料製造工場
「エーテル」製造工場

「セルロイド」製造工場
溶劑ヲ用フル護謨製品製造工場
脂肪油精製工場
揮發油ヲ用フル油脂採收工場
「ボイル」油製造工場
礦油蒸溜及精製工場
乾燥油又ハ溶劑ヲ用フル擬革紙布、防水紙布製造工場
亞硫酸瓦斯、鹽素瓦斯、水素瓦斯ヲ使用スル工場
瓦斯製造工場
骸炭製造工場
石灰窒素、「カーバイト」ノ製造其ノ他ノ電解工場
鑛金工場
鑢製造工場
金屬、骨角、貝殼ノ乾燥研磨工場
硝子ノ腐蝕、砂吹及粉碎工場
陶磁器、琺瑯器、硝子、「セメント」、螟灰、石灰製造工場
織物、編物ノ起毛工場
製綿工場
麻ノ梳解工場
發電、變電及蓄電所

參照

工場法第一條　本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス
一　常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノ
二　事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ
本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

答申

(一)　列記業務ノ外尙他ノ業務ヲ追加スヘシト爲シタルモノ　六八件（五五種）
(二)　列記業務中削除スヘキ業務ヲ指摘シタルモノ　四二件（一六種）
(三)　列記業務ヲ營ムモノト雖、或範圍ニ於テ適用除外ノ道ヲ啓クヘシト爲シタルモノ　九件
(四)　五人ヲ八人ト爲スヘシト爲シタルモノ　一件

(五)但書ヲ削除スヘシト爲シタルモノ　ナシ

第二號

常時十五人以上ノ職工ヲ使用スト雖工場法ヲ適用セサル工場、但シ常時使用スル職工三十人ニ滿タサルモノニ限ル。(工場法第一條第二項參照)

菓子、飴又ハ麺麭ノ製造場

精穀場

寒天、麺類、凍蒟蒻、凍豆腐、湯葉、麩、清酒、濁酒、白酒、味淋、燒酎、醬油、酢又ハ味噌ノ製造場

籠、簾、行李、和傘骨其ノ他竹、蔓、莖又ハ葉ノ製品工場

經木眞田又ハ麥稈眞田ノ編製場

「アタン」又ハ「バナマ」製ノ帽子其ノ他之ニ準スヘキモノノ編製場

扇子、團扇又ハ提燈ノ製造場

紙製玩具、造花其ノ他紙、棉、布帛類ヲ以テ製スル小細工品ノ製造場

形紙、紙函又ハ元結ノ製造場

被服、足袋其ノ他布帛類ノ裁縫場

刺繍、「レース」、「バテンレース」又ハ「ドローンウオーク」工場

危險ナル機械ヲ用ヒサル櫓、櫓、指物、建具又ハ木製家具類ノ製造場

參　照

工場法第一條本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス

一　常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノ

二　事業ノ性質危險ナルモノ又ハ衞生上有害ノ虞アルモノ

本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

答申

(一)列記業務ノ外他ノ業務ヲ追加スヘシト爲シタルモノ　九六件(五八種)

(二)列記業務中削除スヘキ業務ヲ指摘シタルモノ　一三件(五種)

(三)三十人ヲ五十人ニ改ムヘシト爲シタルモノ　一件

(四)人數ニ依リ適用ノ範圍ヲ定ムルコトヲ不可ナリト爲シタルモノ　ナシ

第三號

工場法第二條第二項ノ輕易ナル業務及就業ニ關スル條件

一　工場法第二條第二項ノ輕易ナル業務トハ危險又ハ衞生上有害ノ虞ナキ場

所ニ於ケル左ニ掲クル業務又ハ地方長官（官立工場ニ在リテハ其ノ所轄官廳）ニ於テ之ニ準スヘキモノト認ムル業務ヲ謂フ。

菓子、煙草、燐寸、刷子又ハ鈕釦ノ製造工場ニ於ケル函詰（工場法施行一年後ニハ黄燐燐寸及硫化燐燐寸ノ函詰ヲ除ク）、綴付、包裝又ハ標紙ノ貼付

紙函製造工場又ハ燐寸函製造工場ニ於ケル函貼

印刷、製本又ハ製紙工場ニ於ケル紙ノ折疊又ハ帶封掛

製絲工場ニ於ケル屑物ノ處理

手織物工場ニ於ケル絲繰

一　前項ニ列記シタル業務ニ準スヘキモノト認ムル業務ニ付ハ、地方長官ハ豫メ農商務大臣ノ指揮ヲ受ケ之ヲ定ムルコト（官立工場ニ在リテハ其ノ所轄官廳ハ農商務大臣ニ協議シテ之ヲ定ムルコト）

一　第一項ノ業務ニ付十歲以上ノ者ノ就業ヲ許可セムトスルトキハ、一日ノ就業時間ハ六時間以內ニシ、其ノ三時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十分ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ケ、每月四回以上ノ休日ヲ設クルコトヲ條件トスルコト

參照

工場法第二條　工業主ハ十二歲未滿ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

但シ本法施行ノ際十歲以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歲以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

答申

(一)列記業務ノ外他ノ業務ヲ追加スヘシト爲シタルモノ　二一種

(二)列記業務中削除スヘキモノヲ指摘シタルモノ　二種

(三)第二項全文ヲ削除スヘシトナシタルモノ　一件

(四)六時間ヲ八時間ニ改ムヘシト爲シタルモノ　三件

(五)六時間ヲ五時間ニ改ムヘシト爲シタルモノ　一件

(六)四回ヲ二回ト爲スヘシト爲シタルモノ　三件

(七)四回ヲ五回ト爲スヘシト爲シタルモノ　一件

第四號

工場法第九條及第十一條ニ依リ十五歲未滿ノ者及女子ノ就業ヲ禁止スル業務

一　原動機、電氣機械其ノ他ノ機械又ハ動力傳導裝置ニ附屬スル勢輪（クランク、コンテクチン）、曲柄、連接

桿(クロツドクロス)、聯桿器(ロツドピストン)、喞子桿、發電機ノ「コンミユテーター」、轉子(ローター)、鋭利ナル刃物、齒輪、調帶車、車軸車(カツプリング)、軸接手又ハ之ニ準スヘキ危險ナル部分ヲ其ノ運轉中ニ掃除、注油、檢査又ハ修繕スル業務

二　危險ナル方法ニ依リ運轉中ノ機械又ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ノ取附ケ又ハ取外シヲ爲ス業務

三　汽罐ノ取扱

四　發電機、發電機ノ抵抗器若ハ變壓器ノ取扱又ハ高壓電線ノ接續

五　鋸機ニ木材ヲ送給スル業務

六　完全ナル柵圍其ノ他ノ危險豫防裝置ナキ大ナル齒輪、調帶車、勢輪、調帶、調索又ハ之ニ準スヘキモノニ接近シテ行フ業務

七　完全ナル柵圍其ノ他ノ危險豫防裝置ナキ車軸道、足場其ノ他之ニ準スヘキ場所ニ於ケル業務

參照

工場法第九條　工業主ハ十五歳未滿ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危險ナル部分ノ掃除、注油、檢査若ハ修繕ヲ爲サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ爲サシメ其ノ他危險ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

同第十一條　前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム

前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十五歳以上ノ女子ニ付之ヲ適用スルコトヲ得

答申

(一)列記業務ノ外尙他ノ業務ヲ追加スヘシト爲シタルモノ　三件

(二)列記業務中削除スヘキモノヲ擧ケタルモノ　一件

(三)列記業務中ニ付危險ナルモノニ限ルノ意味ヲ表ハス樣書キ改ムヘキコトヲ答申シタルモノ　二七件

第五號

工場法第十條及第十一條ニ依リ十五歳未滿ノ者及女子ノ就業ヲ禁止スル業務

(甲)　十五歳未滿ノ者ノ就業ヲ禁止スル業務

一　砒素、砒素化合物、水銀、水銀化合物、黃燐、硫化燐、「シアン」水素酸、「シアン」加里、「フルオ[illegible]ル」水素酸、硫酸、硝酸、鹽酸、苛性曹達、石炭酸其ノ他之ニ準スヘキ毒劇性料品